

# バルト神学における「罪」について

—On the Concept of Sin in the Theology of Karl Barth—

中澤 實郎

Jitsuro Nakazawa

## 目次

### 一. 序

### 二. 罪の認識

### 三. 人間の高慢

### 四. 人間の怠慢

1. 神とその関係における拒絶 (Versagen)
2. 人間仲間とその関係における拒絶
3. 被造物構造との関係における拒絶
4. 時間的歴史的限界 (zeitlich geschichtliche Begrenztheit)

### 五. 人間の虚偽

### 六. 補遺

## 一. 序

「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入りこんだ」とパウロは言う（ロマ5章12節）。一人の人とはほかでもない、アダムである。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（創世記2章16節）という神の戒めにアダムは背いた。アダムの墮落が罪の起源という。ここから、キリスト教の神学において罪の問題は、創造論において取り上げられるのが常であった。例えば、J.カルヴァンは『キリスト教要綱』第1篇「創造者なる神を認識することについて」に続いて、第2篇第1章で「アダムの墮落と背反とによって全人類は呪いをこうむり、はじめの地位から落ちた。ここに原罪がとりあげられる」<sup>(1)</sup>と述べている。桑田秀延も『基督教神学概論』での方法は、第2章「世界—創造と摂理」、第3章「人間とその罪」、第4章「イエス・キリスト」である。

だが、カール・バルトは罪を創造論ではなく、和解論で取り上げる。その理由を彼は、和解の前提は罪ではなく、契約と考えるからである。<sup>(2)</sup>そして、和解は、破られた契約の成就であり、罪とは、契約の成就に公然と対立するものである。しかも、バルトは罪を「enorme Zwischenfall」（異常な偶発事件・エピソード）にすぎないという。<sup>(3)</sup>

とは言え、バルトは「悪の問題」を、『創造論』Ⅲ/3、で「Gott und das Nichtige」という主題で取り上げている。バルトによれば、神の摂理からは捉えられず、神の全能の業によって保持されず、神の世界支配を拒否する要素 (Element) が、この世界事象 (Weltgeschehen) の中にある。被造物を脅かし・不安の中に陥れ・破滅させる要素がある。このような要素、即ち、Widerspruch、Widerstand、Fremdkörper をバルトは「das Nichtige」と名づける。<sup>(4)</sup>バルトは、Das Nichtige (虚無的なもの) を、神の創造の業によって滅ぼされた「無」で、その傍らを神が軽蔑して素通りされたところの「可能性」にすぎず、それは神を怒らせ、審き主として登場させ、神御自身を虚無に対決させたもの、神の欲

しなかったもの、神が然りを語ることを望まなかったもの、イエス・キリストにおいて戦場から追放され、廃棄され否定されたものであるという。<sup>(3)</sup>

パウロ・テイリッヒは、人間の存在を不安にし脅かすものとして、死と虚無と罪という三つを挙げている。

さて、罪の本質についてジャン・カルヴァンは、「アウグステイヌスは高慢がいつさいの悪の発端であると言ったのは間違っていない」と述べ、罪とは不従順、虚偽・傲慢であるという。<sup>(4)</sup> バルトは、カルヴァンの概念を用いて、罪を高慢・怠慢・虚偽の三様態として『和解論』で論じるのである。

次に、罪の認識についてである。ジャン・カルヴァンは、「神を知る知識とわれわれ自身を知る知識とは結び合ったことがらである」といい、<sup>(5)</sup> また、「神についての知識は人間の精神のうちに、生まれながらにして入れられている」<sup>(6)</sup> という。これに対して、バルトはカルヴァンの教説には「自然神学のある種の要素を完全にぬぐい去っているとは言えない」と批判する。<sup>(7)</sup> バルトは『神論』で〔神認識〕について次のようにいう。「われわれは、神は神の言葉を通して現に、認識され繰り返し認識されるであろうということから出発する」<sup>(8)</sup> と、また「神認識は、神の言葉の啓示が聖霊を通して実現される中で起こる」と言う。<sup>(9)</sup> 更に、「神を認識し得るという根拠は、人間や世界や従って被造物の中にはなく、創造者そのものの中にある。もし神認識の可能性が神自身とその啓示からではなく、何処か違うところから生じるならば、神は創造者ではないだろう」と言う。<sup>(10)</sup> 「神はただ神を通してのみ、認識できるのである」<sup>(11)</sup>。バルトは罪についても徹底したキリスト論から取り上げるのである。本論は『和解論』における「罪」について、先ず初めに罪の認識について、次に「罪」の三様態を取り上げる。

## 注

- (1) カルヴァン『キリスト教綱要』IV 渡辺信夫訳 15頁
- (2) カール・バルト『和解論』IV/1 井上良雄訳 38頁
- (3) 上掲書 115頁
- (4) カルヴァン『キリスト教綱要』IV 渡辺信夫訳 19頁
- (5) 上掲書 45頁
- (6) 上掲書 55頁
- (7) Karl Barth『Gotteserkenntnis und Gottesdienst nach reformatorischer Lehre』
- (8) Karl Barth『Kirchliche Dogmatik』II/1 s.66
- (9) a.a.O. s. 66
- (10) a.a.O. s. 67
- (11) a.a.O. s. 67
- (12) Karl Barth『Kirchliche Dogmatik』II/3 327
- (13) a.a.O. s.346

## 二、罪の認識

バルトは、「罪という事柄についての認識根拠が、もしイエス・キリストでなければ、この事柄についての知識を人はどこから得られると考えるのか、これこそが罪について論じる第一の課題である」と先ず述べる。<sup>(1)</sup> そして、「根本的・普遍的に言って、人は、罪の認識においても、神についての認識の一定の変形 (Modifikation) に接するのだということ、しかも、神御自身によって人間に伝えられた認識、すなわち啓示による認識・信仰による認識に接するのだということ、人はここで、すべての真面目なキリスト教神学によって承認され主張されている考え方として、前提する」という。<sup>(2)</sup> 人間は自ら罪を認識することはできない。「人は、自分が限界を持った者であり、欠陥のあるものであり、不完全なものだということ、理解し認識するであろう。人は、人間としての自分の現実存在の問題性を、自覚するで

あろう。しかし、人は、それによって、罪の人間としての自分の存在を、決して自覚したのではない。神に対して反逆し・隣人に対して反逆し・自分自身に対して反逆する自分を、決して自覚したのではない」。(3) バルトは、人間の不完全性を認めても、それは罪というものではなく、限界というものにすぎないという。バルトは、R. プルトマンを意識して次のように述べる。「自分自身から出発して神の御言葉なしに人間が達することの出来る、その現実存在の内的問題性に対する洞察は、その罪を認識するための準備 (Vorbereitung) としても、一種の先行的理解 (Vorverständnis) としても問題にならない」(4) と。人間は自分の罪の認識においてさえも、彼がそれを神の御言葉に聞くことなしに自分の自己理解の枠の中で行う限りは、罪の人間であり、そのような者として、この罪の認識という事柄においても、認識する者ではないからである。

しかし、とバルトは言う。「罪認識は、いつもただ、神による認識としてだけ、しかも啓示による認識・信仰による認識としてだけ可能であるという一般的・基本的な理解では、われわれは満足することが出来ない」と(5)。なぜなら、和解論に先立つ「罪ニツイテノ章」(Locus de peccato) をもった古今の神学の了解というものは、罪認識を可能にし現実化する神認識という言葉によって理解すべきものは、イエス・キリストにおける神の現臨・活動・啓示とは区別されたものとしての、人間に対するその根本的関係における神についての認識である。そのような神認識というのは、人間に元々普遍的に、その良心に媒介されて啓示され、あるいは歴史において聖書とは別に特別に啓示された、神の律法による、神についての認識である。そのようなイエス・キリスト以前の、またイエス・キリストの外に在る神についての認識において、人間は、自分が罪人であるということを受容させられ、自分の罪が何であるかということを示される」と(6)。バルトは、事柄を以上のような仕方でも提示することに抗議せざるを得ないと言う。

かくしてバルトは、律法と罪について、聖書以外のところから教えられる場合の危険について次のように述べる。それは、「罪と律法を聖書以外から知っているということは、事実上もはや信仰の認識ではない。すなわち、それはもはや神の言葉と御霊によって媒介された認識ではなく、自分自身との対話によって得られた認識であろう」。(7) そして、「そのようなことで本当に、人間の罪の認識が生ずるであろうか。そのような考えは、人が自分の義認について考えていることにも移行し、そして、そこからさらに和解について彼の理解に移行し、最初は聖書と教義の語ることを否定しないけれども、自分と人間全体のためにイエス・キリストによってその十字架の死において得られた罪の赦しと義がないならば、自分にとっても人間全体にとっても、希望もなく平和もないのだということを、もはや理解しなくなるであろう。それは、やがては、一般的な宗教哲学或いは実存哲学の領域に移るであろう」と言う。(8) そして、バルトは近代神学者の教説を批判する。その中から、ヘーゲル、シュライエルマッハー、トレルチを取り上げてみたい。

ヘーゲル (Hegel) は、Die absolute Religion という表題のもとに、1821年に初めて行われた宗教哲学に関しての講義の第3部で、「Das Reich des Vaters-des Sohnes-des-Geistes」という諸概念に配列された彼のキリスト教教義学を展開した。彼は、「Reich des Sohnes」という概念のもとで、先ず、「創造と人間の罪」を取り扱い、次いで「神人と和解」(Gott-menschen und Versöhnung) を取り扱った。このように、罪が「御子の国」との関連の中で現れてくるのを見ると、最初傾聴をうながされるような気持ちがある。しかし、間もなく失望させられる。それは、ヘーゲルの罪についての教説は、神と人との和解の教説に先立っていて、従って、前者は決して、後者から与えられるというようなものではない。彼においては、神は絶対的概念・絶対的精神・絶対的真理と同一であるように、また、「父」は永遠的・包括的・全体的な普遍性であり、「御子」は現象の無限の特殊性であり、「聖霊」は思惟の円環運動がそれによって再び新たに開始される個別性そのものなのである。ヘーゲルにおいては創造と罪と和解は、円環をなして動いている有限的精神の歴史の同様に必然的な三つの契機である。バルトは、これでは、創造と罪の間の連続、また、罪と和解の間の連続も断ち切れない。そして、このような過程全

体がその現実存在の中で営まれる有限的精神は、絶対的精神・絶対的概念・絶対的真理の、従って、神自身の運動の生命中的一契機にすぎないと批判する。<sup>(9)</sup>

シュライエルマッハー (Schleiermacher) によれば、罪とは、われわれの神意識によって我々の自己意識が規定せられて、そこでは我々がわれわれの神意識の相対的な無力さ乃至それが阻害されていることを不快として自覚するような状態を言う。神意識のない罪意識はなく、キリスト者の心においては、救いの力を意識することのない罪意識もない。一方罪意識のない神意識乃至救いの意識もない。しかしまた、我々の罪深さ (Sündlichkeit) によっても廃棄されないような根源的な完全さという前提がなければ、その上に立って我々が神意識覚醒の以前に自分の罪深さを自覚するということもない。その際、罪という言葉によって理解されるのは、人間が自分に先立つ諸世代の生活形態に従属することによって犯すと共に自分自身の行為としても犯す抵抗ということである。バルトはシュライエルマッハーの教説は、次のような二つの点で危険であるという。

(1) 彼は罪というものを、我々の意識の中で神の恵みによって否定されたものとして理解しようとする。もしここで、イエス・キリストとの対質によって人間に与えられる否定のことを考えたのであれば、即ち、イエス・キリスト (神の恵みによって) において排除されたもの、断罪されたものとして、またイエス・キリストに対するそのような否定的関係にあって暗黒な仕方リアルなものとしたのであれば、どのような展望が示されたことであろう。しかし、彼においては罪の否定は、神についての我々の意識の中で起こるにすぎないのであって、神と人間の出会いと歴史の中で起こるのではない。

(2) シュライエルマッハーにおいては、救いは神意識をもつことである。従って罪とは、神意識の無力さとして、それが阻害されることとして、その制約、後退として定義するということが起きる。彼においては、罪は、我々の神意識によって否定されたものとしてだけ現実的である。悪は、ただ、善のかたわらにだけ存在する。従って、人間の自己発展が行われるためには、何らかの程度において罪が共に存在しなければならない、ということになる。彼は、恵みに対して罪を相対化するという正当な考え方から、罪を恵みと同じ秩序 (zusammenordnen) とし、罪を恵みの補助物として評価し、否、さらに基礎づけるという考え方が生まれたのである。これは、罪の必然性の確立であった。<sup>(10)</sup>

以上のようなシュライエルマッハーの罪理解に対してバルトは、罪の否定面をどのように強調しても、肯定的に理解された罪は、真の罪だろうかと批判する。シュライエルマッハーは一切の神学的認識の源として選びを絶対的なものとして定めた、キリスト教的敬虔自己意識 (das christlich frommen Bewußtsein) という、外に向かって閉ざされた場所の中では、真の罪も真の恵みも、双方とも示されることは不可能であったとバルトは言う。<sup>(11)</sup>

エルンスト・トレルチ (Ernst Troeltsch) は、原始キリスト教の段階とカトリックの段階と古プロテスタントの段階と新プロテスタントの段階を区分し、新プロテスタンティズムという概念を作った。彼は『Glaubenslehre』で、罪について以下のように説明する。罪とは神の似姿という思想の不透明で不可思議で神秘的な側面である。即ち、精神の立場から見れば、罪とは神に反抗する自己肯定として現れる。神についての思いは、信仰的、信賴的な心術 (Gesinnung) を要求するが、罪はそのような心術の拒絶であり、自分の有限的な自己の力と利益とに対するそれから生まれる頑強な主張である。そして、罪の可能性は、それ自身、人間を真の善へと育成するための手段である。勿論、人間が自己主張し、精神の出現を拒むことによって、本来的な罪性というものも存在し、従って、そのために呼び起こされた神的意志の反動の感情として、罪責感というものも存在する。それは、客観的な罪責ではなく、償いを要求するような神的秩序の破損でもない。そうではなくて、それは一つの主体的な感情である。神と

の関係の罪深い混濁を承認する主体的な感情である。そのような罪の感情は、キリスト教的神観念との連関において始めて生まれるのである。以上、バルトはトレルチの罪理解はカトリシズムへの傾向があると批判する。実際、トレルチのこの遺稿『Glaubenslegre』を編集し出版したゲルトルート・フオン・ル・フオールはカトリックに改宗した。<sup>(42)</sup>

さて、バルトは、罪についての認識を「神の御子の従順の鏡に映った罪の人間」(DER MENSCH DER SÜNDE INSPIEGEL DES GEHORSAMS DES SOHNES GOTTES) という主題で取り上げる。<sup>(43)</sup> そこでバルトは罪の認識は、神による認識であり、啓示による認識であり、信仰による認識でなければならないという。そして、それはどのようにして基礎づけられるのだろうか。まず、バルトは次のような命題を提示する。「人間が罪の人間であるということ、人間の罪とは何であり、罪が人間にとって何を意味するかということは、イエス・キリストが認識されることによってだけ真に認識される」と。<sup>(44)</sup> このような認識の中に、人間の罪の認識は包含されている。このような認識の実現において、またそれと共に、人間の罪の認識も実現される。そこでは、聖書以外の材料から得た規範概念、ひそかに或いはあらわに独語において得られる罪についての知識、そのようなすべてのものは、対象の無い者、無用なものであることが明らかになる。さらに、欺瞞的なもの、空虚なもの、それ自身が罪の一つの姿であることが明らかになる。それは何故か。それは、別のより良い方法が、キリスト論的方法が見い出され示され得るからというのではない。そうではなくて、それは、イエス・キリスト御自身がそこに在し、生き、語り、証し、説得されるからである、とバルトは言う。<sup>(45)</sup>

では、何故イエス・キリストの認識においてなのであろうか。それは、「神に反抗するような人間を、御自身の御子イエス・キリストの献身とその死において審き、死に渡し、決裁し、死人の中からの甦りにおいて、すべての時代のためにその存在、生活、言葉、証しにおいて、現されたからである」とバルトは説明する。<sup>(46)</sup> バルトは簡潔に、「義とされた人間が人間の罪の意味を知るのは、キリストの十字架においてである」と述べ、幾つかの聖書を例証として取り上げているので抜粋する。

- (1) ルカ15章11以下。放蕩息子が、天に対しても父に向かっても罪を犯したということ、父に告白しよう決心するのは、その悲惨の中であって、父の家には食物があり余っているということ、思い出すことによってである。そして、彼がそのような決心を実行に移すのは、その父が彼を見て、哀れに思って走りより、その首をいだいて接吻する時である。
- (2) ルカ5章8以下。ペテロをひれ伏させ、「私は罪深い者です」という理由を言うと共に、「主よ、私から離れて下さい」と願わざるを得ないようにさせたのは、イエスの命令に従って行った漁が全く予期しない結果を生んだとき、そこに示されたのは神の恵であった。
- (3) ヨハネ15章22～。主は世の罪について、「もし私が来て彼らに語らなかつたならば彼らは罪を犯さないうすんだであろう。しかし今となっては、彼らには、その罪について言いのがれる道はない」と言われた。
- (4) ヨハネ16章8～。イエスは御自身についての証しに関して、「それ(真理の御霊)が来たら罪と義と審きとについて、世の人の目を開くであろう」と語られた。

バルトは以上のような線上で、基本的に4点にわたって、罪の認識について述べているので纏める。<sup>(47)</sup>

1. イエス・キリストの現実存在は、人が絶対的に純粋な、熟練した、明瞭な姿をした人間の罪に接する場所である。人間は、「私は性来、神と自分の隣人を憎む傾向を持っている」(ハイデルベルク信仰問答第5問)ということ、いつどこにおいても、認識し告白せざるを得ない。

しかし一体、人は、どのようにして、そのことをはっきりと知り、確実に考えまた語るようになるのだろうか。それは、新約聖書において証しされているイエス・キリストに対しての人間の存在と態度

とに注意を向ける場合である。また、イエス・キリストに対して偽ることの出来ない人間の存在と態度に目を向ける場合に明らかになる。そのような人間とは、イスラエルの敬虔な指導者たち、愚鈍で無節操な民、不正な審きを行った政治家と裁判官、無力な涙を流す女たち、逃亡する弟子たち、主を否むペテロであり、主を裏切るユダである。これが、すべての行為の目標であり、それらすべてのことを忍ばねばならぬあのイエス・キリストの光に照らされた、明白な罪の人間である。ここにおいて、悪は善の傍らにあるのではなく、善に対立しているのだということ、それが同時に神に対する敵対であり、兄弟殺戮であり、自己破壊だということが明らかになる。<sup>(9)</sup>

2. イエス・キリストは、罪人の反抗に忍耐され、人間の罪の現実の覆いを取り除かれるが同時に、罪人の非道 (Verwerflichkeit) をあらわにする審判者 (Richter) である。

悪を、即ち神敵対、兄弟殺戮、自己破壊等を悪と決定する権威を持つのは一体誰であろうか。それは人間の良心の声なのか。それとも普遍的な人間理性の中にある「永遠ノ法」(lex aeterna) の声であろうか。それとも、あらゆる時代のあらゆる民俗の中で尊重された規範の声か。バルトは、「イエス・キリストがその審判者である」という決定は、次の2つの場所において語りかけると言う。<sup>(10)</sup>

第一は、神の国である。イエスの身において天から来た神の国、それは、人間がそれに対して心を開くことも閉ざすことも出来るような観念の世界ではない。イエスは神の国の王としての父の御名において、その父の御子また御言葉として人間に対して立たれる。この神は、恵み深い人間の主であり、親愛をもって人間に身を向け人間と結び付かれる主であり、人間が成り出る以前に人間にその御心を開き御自身を与え、人間を神に属するものとして欲し、知り、人間を神との交わりの中にあり神との契約の中にある存在として定めた主である。御国の到来において、御自身のところへの御子の啓示と現臨において神御自身が来られたのである。この審判者が不正と言われること、それは不正である。彼が悪と呼ぶ人、その人は悪であるとバルトは言う。<sup>(11)</sup> 第二。人間は誰も、自分をイエスと比較対照することは出来ない。人は、イエスを、人間仲間 (Mitmensch) として人間の立場、意見、判断から自分を引き離すことは出来ない。また、人は、歴史的、心理的に展望し、洞察することによって離脱することもできない。人は哲学的に自分自身の場所に連れ戻し、そこで自分を主張し、自分はイエスの真理の言葉などからは自由だと考え、自分は彼に従属などしていないと考えることは出来ない。そのような態度を他のすべての人間仲間に対しては出来るだろう。しかし、人は、そのような態度を、イエスに対して取ることは出来ない。何故なら、イエスは、我々の心や良心の中で決定されたのではなく、むしろ我々に関して決定を与える真の生きた「永遠ノ法」(lex aeterna) である。我々の説明によって始めて妥当するものとなる「永遠の法」ではなく、「永遠ノ審判者」(iudex aeternus) として御自身を説明し、妥当せしめる「永遠ノ法」である。人は、イエスを相対化することは出来ず、彼と討議することも出来ない。<sup>(12)</sup>

3. 罪がその現実性においてだけでなく、その顛倒した姿においてだけでなく、一切の人間的存在と行為の真理として、あらわになったのも、イエス・キリストの現実存在においてである。

悪は、あらゆる人間において、いつも同じ目立たしさと濃度と危険性をもって現れるものではない。また、人間が、自覚的な罪人でありながらも、また自他共に罪の実行者と認めるような者でありながらも、神の善き被造物であることをやめないということも、間違いない。さらに、罪というものが、人間を自己疎外させる一規定であり、それによって人間が自分にとって疎遠な一領域に入り込み、さらに疎遠な一つの力のもとに立つようになるということも間違いないことである。そして、罪はその人の罪としてしか存在せず、従ってまた、彼自身も、罪の遂行者、罪人としてしか、存在しないのである。このことこそ、人は承認しようとしなない。しかも、人はあのような様々の間違いない事柄を楯にとって、自分自身というものを自分の罪から区別するという仕方、それを承認しようとしなない。

そのような自我は、場合によっては、自分の罪を告白しようという心の傾きや用意を持つてはいるで

あろうが、自分自身をその罪の根源であり罪の座であると告白し、罪の人間であると告白するような、心の傾きや用意を持つことは困難である。<sup>24</sup>

イエス・キリストは、罪人の味方となり、罪人の状況を御自身のものとし、罪人と連体であると語り、また連体性を持ち、神の前に罪人の事柄を代理することを引き受けたが、そのことによってイエスは、この織物を最後決定的に引き裂き、また彼は、罪の真理をあらわに示された。彼が引き受けたのは、罪人の事柄であり、従ってそれは、義人の事柄ではない。イエス・キリストに与る者は、他の者よりも優越しているなどということは出来ない。その人は、宮で取税人と共に遠く離れて立つであろう。イエス・キリストに与るということは、比較的善い人間にも、比較的悪い人間たちとの最も誠実な連帯性においてだけ可能なことであって、悪い人間たちと対立し区別された状態で、自分一人で可能なことではない。イエス・キリストは罪人としてのすべての人間に対して、味方となられたのである。その場合、ただ一人といえども、別様には扱わなかった。そのことによって彼が明らかにした罪の真理は、彼が我々の代理となられたことを、等しく必要とする者たちであり、我々は皆、罪を犯す者たちだという真理である。<sup>25</sup> 人は、罪の非道さの段階を引き出したり、罪の危険性の差別を引き出したり、そのような差違に関して自分自身や他の者が比較的重い荷を負っているとか、比較的軽い荷を負っているとか考える可能性はない。「すべての罪は、汝にはない」(All Sünd hast du getragen)。大きいものであっても小さいものであっても、明白なものであっても人の注意を引かぬものであっても、人間のすべての罪は、イエス・キリストがそれを担われたのである。彼が罪を担われたことによって、最大の罪も、人間を断罪することは出来ない。彼の光において示される罪の真理は、罪とはその一切の姿において一つのものであり、そのようなものとして非道のものであるという真理である。イエス・キリストにおいて起こった神と人間の和解の光に照らされる場合には、そこにこそあの虚偽の織物 (Lügendewebe) 全体の源があり連関があるあの区別は、消滅する。人は悪を欲したまうことによって、自分自身に対して疎遠なものにし、自ら自分自身を喪失する。ラテン語の「peccatum」とドイツ語の「Sünde」という言葉も、その根本的な意味は、本来の正しい道を「はずす」(Verfehlen) という考え方に基づいている。また、人間が罪人として自己疎外するのは、神から自分に与えられた被造物としての善い本性から自己疎外するのだということも正しい。神との契約の中にある存在として定められたその定めから自己疎外し、他の人間と共にある状態から自己疎外し、そのような状態にあって神の似姿であるという状態から自己疎外し、身体の霊魂としての秩序の中にある生活から自己疎外し、自分に貸し与えられた期限つきの始めと終わりを持った時間の中における存在から自己疎外するのだということも、正しい。神は、人間の愚かさや悪のために犯す自分自身の疎外、逸脱、錯誤から引き出し、連れ戻し、自分自身に立ち返らせ、それと同時に、神の被造物としての善き存在へと立ち返らせ、信実を保ち、示された。従って、人は、「神は罪を憎まれたが、罪人を愛することを止めない」(Gott zwar die Sünde haßt, den Sünder zu lieben aber nicht aufhört) と言うことができる。しかし、そのようなことを真に言うことができるのは、ただイエス・キリストにおける神に目を注ぐことによってだけである。イエス・キリストは、絶望的な人間の事件を弁護するために、全く不正の中にある人間に対しての神の正しさを快復し、喪失してしまった人間の快復のために来られたのである。

4. 最後に、イエス・キリストについての認識は、同時に、罪の意義 (Bedeutung) と効力 (Tragweite) についての認識である。アンセルムスの言葉を借りれば、「罪ノ重サハドレホドカ」(quantum ponderis sit peccatum) という認識である。<sup>26</sup>

悪がどのような悪であるにしても、神はその悪に対しても主である。人は、悪をあまり真剣に考えて、悪を、創造的で、独立した基礎を持ち、独立した事実を創り出し、唯一の生ける神との真剣な意味で競争し、神と支配を争うような本源的な神だと考えることは許されない。イエス・キリストの死と甦りにおいて、悪は、克服され、神の愛と怒りとの全能によって打ち破られ、打ち砕かれたのである。また、

罪は、神の中に何ら積極的肯定的な根拠を持たず、神の存在の中に場所を持たず、神の意志と業とに対しても、何ら積極的肯定的に関与しない。罪は、神の被造物ではなく、それはただ、神が欲しなかったし、今も欲しないし、将来においても欲しないものの代表として、しかも、最も著しい代表として被造世界に姿を現すのである。神によって棄てられ、断罪され、排除されることによってだけ生きるものの代表。絶対的な虚無 (das Nicttige) の代表である。また、絶対に不可能なものの可能性以外には、何の可能性もない、不条理 (das Absurde) である。罪はまさに不条理である。すなわち、あの創世記の物語において、混沌の動物である蛇の声に耳を傾けることとして述べられているように、罪とは、人間が虚無に対して不条理にも心を開くこと、また虚無に対して不条理にも決心することにほかならない。罪は、ただそのような不条理の出来事の中にだけ、存在する。

そのようなことを、人はどこから知るのであろうか。罪は、神によって、イエス・キリストにおいて、神に否定されたもの、棄てられたもの、禁じられたものであり、虚無そのものである。即ち、神の左手にだけ存在するという事実から知ることが出来る。<sup>(6)</sup>

さらに、罪の現実がどのように絶対的に担い得ないものであるかということは、神が罪に対するその怒りと審きの遂行を、イエス・キリストの現実存在において、御自身の事柄とされたということによって始めて、知ることが出来る。この世に経過における単なる障害を取り除くためならば、また、人間の状況の相対的な不完全性を軽減するためならば、神が人となる必要はなかった。また、神の御子が十字架で死ぬ必要はなかった。しかし、今や、神は人となられた。神の御子は十字架で死なれた。従って、もはや罪がそのような障害や相対的な不完全性ではないということは、否定出来ない。人間の抗議と反抗、その神喪失、その非人間性、自分自身に対してのその犯罪は、神を直接に呼び出すような不条理である。<sup>(7)</sup> 創世記の物語によれば、あの最初の間人がそのために罪人となり、その結果またそれに倣って他のすべての人間も罪人となったというあの行為を、実に些細なこととしてきたことが明らかになった。「罪ノ重サハドレホドカ」というアンセルムスの問いに対しては、キリストの十字架から答えが与えられるのである。罪の重さ、人間の過ちの重大さ、そこに陥ろうとする深淵の深さの克服と除去のために、神は御自身を与え、御自身を犠牲にするという仕方ですべて遂行されたのである。<sup>(8)</sup>

バルトは最後に次のことを述べて、この項を終える。イエス・キリストが為されたことは彼が、我々のために、我々に代わって、為されたことなのである。従って、あの聖金曜日にイエス・キリストを取り囲んでいた我々の代表者であった者たちの業において、我々が見るもの以外には、我々の側での何の協力もなかったのである。イエス・キリストは、死を忍びつつ、そして死を忍ぶことにおいて只一人従順な者として、神の前に、我々の代理となられて、この世を、神と和解された。神の御子の従順という鏡こそ、このような自己認識を引き起こす強制力である。<sup>(9)</sup>

#### 注

- (1) Karl Barth 『Kirchliche Dogmatik』 IV/1 s.397 井上良雄訳 6頁
- (2) aa.O. s.397 井上良雄訳 6頁
- (3) aa.O. s.397 井上良雄訳 7頁
- (4) aa.O. s.398 上掲書 8頁
- (5) aa.O. s.400 上掲書 9頁
- (6) aa.O. s.400 上掲書 11頁
- (7) aa.O. s.411 上掲書 28頁
- (8) aa.O. s.412 上掲書 29頁
- (9) aa.O. s.415 上掲書 34頁
- (10) aa.O. s.417 上掲書 36頁
- (11) aa.O. s.418 上掲書 39頁



- (12) a.a.O. s.423 上掲書 47～53頁  
 (13) a.a.O. s.395 上掲書 5頁  
 (14) a.a.O. s.430 上掲書 57頁  
 (15) a.a.O. s.431 上掲書 58頁  
 (16) a.a.O. s.432 上掲書 60頁  
 (17) a.a.O. s.440 上掲書 72頁  
 (18) a.a.O. s.441 上掲書 74頁  
 (19) a.a.O. s.444 上掲書 79頁  
 (20) a.a.O. s.445 上掲書 80頁  
 (21) a.a.O. s.445 上掲書 81頁  
 (22) a.a.O. s.447 上掲書 84頁  
 (23) a.a.O. s.448 上掲書 86頁  
 (24) a.a.O. s.450 上掲書 88頁  
 (25) a.a.O. s.451 上掲書 90頁  
 (26) a.a.O. s.455 上掲書 95頁  
 (27) a.a.O. s.456 上掲書 97頁  
 (28) a.a.O. s.457 上掲書 98頁  
 (29) a.a.O. s.458 上掲書 101頁

### 三、人間の高慢

バルトにおける罪の認識は、イエス・キリストの認識において出来事になる、というものであった。ところで、イエス・キリストの光に照らされて明らかになった罪とは何か。バルトは、キリスト論的観点から、人間の罪は人間の「高慢」(Hochmut) であると言う。

(1) この定義は完璧なものではない。しかし、その統一性と全体性において、いつどこでも高慢であるとバルトは言う。だが、何故、罪は真先に高慢なのであろうか。彼は、次のように言う。人は罪を一般的に、人間の不従順 (Ungehorsam) と呼ぶ。キリスト教的認識の世界では正当にも、罪を不信仰 (Unglaube) と呼んできた。バルトは、高慢とは、そのように呼ばれて来たものの具体的な姿であると言う。バルトは、このような一般的な定義に反対しようとは思わないという。しかし、彼は、ヨハネ第一の手紙による定義は「律法に対する背反」(Gesetzübertretung) であり、従って、「律法喪失」(Gesetzlosigkeit) の状態に陥ることであると言う。<sup>(2)</sup> 従って、罪とは、神の尊厳を無視し侮って為される人間の行為であり、実際に不従順である。この不従順は、神の愛と主権性、全能、自由という特別な性格に対しての自己疎外に基づいている。人間は、神の戒めの持つ祝福に満ちた意味を誤認し軽視することによって、罪を犯す。従って、罪とは不信仰である。不信仰という苦々しい根から、人間は、必然的、不可避的に不従順が生じる。従って、不信仰こそ、一切の罪の原型であり、根源であり、究極的に唯一の罪であるということは、確かに正しいとバルトは言う。

しかし、バルトは、このような一般的な罪の規定を次のように、具体化しなければならないと言う。即ち、罪とは、「キリストにおいて世を御自分に和解させ」(コリントⅡ 5:19)、キリストにおいて永遠の昔から人間を選び愛し、キリストにおいて人間を創り、人間に対してのその御言葉は永遠の昔からキリストであったし、永遠にわたってキリストであるような神、そのような神に対しての、人間の不信仰である。<sup>(3)</sup> それらのものを、神はイエス・キリストにおいて啓示された。即ち、神がイエス・キリストにおいて為されたことに対しての不従順、不信仰として以外には、罪を定義することは出来ないと言う。

そして、バルトは、イエス・キリストに対する不信仰について、ヨハネ文書から例証する。「私の言葉を受け入れない人には、その人を審くものがある」(ヨハネ福音書12:48)。「信じない者は、すでに審

かれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである」(ヨハネ福音書 3 : 18)、「子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない」(5 : 23)、「御子に従わない者は、命に与ることができないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである」(3 : 36) 等である。

バルトは、このように、イエス・キリストにおける神と人との出会いに目を注ぐとき、罪のあり方と本質の具体的なこと、即ち、罪の不信仰と不従順が、高慢であることが明らかになると言う。そうであるならば、罪を高慢として理解するために、キリスト論的根拠に立ち返らねばならないと言うのである。キリスト論的根拠とは、何か。それは、『和解論』の59節「異郷に赴く神の子の道」で論じた事柄である。即ち、神は異郷に赴き、真の神でありつつ全く別の存在となり、神よりも無限に卑しい存在、すなわち人間となり、我々の肉となられて、永遠の御子は永遠の父に従順となられた。イエス・キリストの現実存在とは、このような神の従順と、このような神の謙遜の出来事であるとバルトは言う。

以上のような神の従順に対して、人間の態度は高慢である。この人間の対応を、次の四つの観点から、バルトは概観する。

1. 神は、永遠の父の永遠の御言葉であることをやめることなく、また、自ら唯一の真の神であることをやめることなく、むしろ、そのような真の神でありつつ、肉となられた。神は、真に現実の人間、試みられ死ぬ人間、即ち、単に制約の中にあるというだけでなくその過ちの結果悲惨の中にある人間、我々と同様な人間になられたのである。

だが、人間は、自分を高くすることを欲し、神の如くあることを欲するのである。<sup>(4)</sup>しかし、人が神の如くあろうとすることは、最初、人間自身には全く隠されている。例えば、創世記3章の蛇の言葉は、不従順への誘いを包含しているが決してあらわには語っていない。そして、あの「木が食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい」と思われたということが、蛇の命令によって起こるのではなく、人間の自由な決断と行為によって起こるのである。バルトは、この隠蔽は極めて強力であるとして、この命題についても三様の事柄を述べる。

(1) 人間がその単独の存在 (Fürsichsei) の中であって、またその自己性 (Selbstheit) の中であって、自分自身を愛し、選び、欲し、主張し、保持し、高めると考えること、それによって、真に人間になることが出来ると考えることは、人間の自分自身についての誤認である (der Irrtum des Menschen über sich selbst)。そのようなことが昂然として行われようと、慎み深く行われようと、人間はそうすることによって、自分自身を見失うのである。何故なら、人間はそのように創られていないからである。<sup>(5)</sup>

(2) 自分自身についてのあの誤認に陥った人間が、自分こそ源泉であり規範であり、究極のものであり得ると考え、自分を「自分自身のために尊重すること」の対象とすることが出来ると考えることは、全く不可解な妄想 (Wahnsinn)、巨人主義 (Titanismus) である。その際にもし、神をそれなりに立派な人物として承認し、真剣に神を信じていると考えているとすれば、それは、自分にとって最高のものを、神としてしまうのである。<sup>(6)</sup>

(3) 最後に、神についての誤認は、言うまでもなく単独で、ただ自分だけを肯定し、ただ自分自身の中にだけ中心を持ち、ただ自分自身の周囲だけを回転している最高の存在と考える。しかし、そのような存在は神ではない。神は単独であられるが、決して単に単独ではない (Gott ist wohl für sich, aber gerade nicht nur für sich)。神は永遠の昔から父として御子において我々を愛し、聖霊によって我々に身を向けられた、三位一体の神 (dreinige Gott) である。

人は、自分を絶対化することによって、自分自身の中に見出すと考え、崇め、拝するものの中に、神々

の原型がある。ルターが正しく見、語った通りに、人は悪魔を創るのである。悪魔 (Der Teufel) とは、独立的非存在 (das independente Unwesen) として、定義するより他はないような存在である。「神のようになる」(創世記3章5節) ということが、蛇が人間に与えたあの「実存解明」(Existenzerhellung) [ヤスパースの用語] の一要素だということに、人は注意しなくてはならない。それは、それ自身強力ではあるが、しかし虚偽で破壊的であるより他はないような一つの大きな混沌の思想そのものである。

以上、神がイエス・キリストにおいて御自身と和解させ、御自身の方へと方向転換された人間の姿は、和解されぬ状態における姿、神から背離した状態における姿、高慢における姿である。<sup>(7)</sup>

バルトは更に、神から背離した人間の姿を、出エジプト記における、神の契約締結及び律法授与と契約の中断の報道から説明する。

この伝承は、イスラエルとの恵みの契約を基礎づけ、保持し、更新されたヤハウエの活動を、あの離反によって阻止されはしなかったが不可解な仕方中断されたと考え、またそのように理解したのである。<sup>(8)</sup> 以下はバルトの聖書釈義である。

出エジプト記19章3節以下は、神が、イスラエルの歴史的現実存在に基礎を与えたと説明する。即ち、「あなたがたは、私がエジプト人にしたこと、あなたがたを鷲の翼に載せて私の所に來させたことを見た」(19:4)。従って、イスラエルの選び及びヤハウエの民としてのイスラエルの現実存在は、目に見え手で触れることの出来る歴史的出来事であった。神とイスラエルの民との契約は、イスラエルの開放という驚くべき仕方、与えられた。イスラエルの民は、自分に与えられている使命にふさわしく、契約を守ることであった。「もしあなたが、まことに私の声に聞き従い、私の契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、私の宝となるであろう。全地は私の所有だからである。あなたがたは私に対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう」(19:51以下)。イスラエルの選びには、一つの意義と目標がある。イスラエルは諸民族の中にあつて、仲保者としての役割を果たし、王としての統治を行い、聖なる民であるべきなのである。契約を守れという命令は十戒という形で語られた。しかも、神はこの命令を語られたのは、解放という行為 (Befreiungstat) においてであった。「あなたは私のほかに、何ものをも神としてはならない」、「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない、それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない」などの、事柄は解放に関してなのである。<sup>(9)</sup> 神がイスラエルに厳しく従順を要求したのは、イスラエルが神に属しているからではなく、神がイスラエルに属しているからであり、御自身をイスラエルに結び付けられたからである。神は幕屋で「私は…あなたに会い、あなたと語るであろう。またその所で私はイスラエルの人々と会うであろう。幕屋は私の栄光によって聖別されるであろう。…私はイスラエルの人々のうちに住んで、彼らの神となるであろう。私が彼らのうちに住むために、彼らをエジプトの国から導き出したかれらの神、主であることを、彼らは知るであろう。私は彼らの神、主である」(出エジプト29:42 以下)。このようなものが契約であり、また神の律法であった。これに対してイスラエルの民は、「われわれは主が言われたことを、みな行います」(19:8) と答えたと言われている。

次は、出エジプト記32章についてである。「私はこの民を見た。これはかたくなな民である。それで、私をとめるな。私の怒りは彼らに向かって燃え、彼らを滅ぼしつくすであろう」(32:9以下)。シナイ山麓で挿話的事件が起こった。神の選びも、契約も、イスラエルの選抜も、イスラエルの現実存在も、疑問化したのである。そのために、もはや、神は、今後の一切のことに対して、怒りをもって断念されるより他はないように見え、樹立された関係を破壊されるように見える。しかし、ここに、モーセが現れて行動する。彼は、神の怒りの遂行者として行動する。神が書き、彼を通して民に与えた二枚の板を投げて打ち砕き、子牛の像を焼き、こなごなに砕き、粉にしてイスラエルの人々に飲ませたのである。

それだけではなく、死刑執行を命じた。

ところが、このモーセは、全く別の役割、即ち、神とイスラエルの間の仲保者の役割を演じるのである。「今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば……。しかし、もしかなわなければ、どうぞ、あなたが書きしるされたふみから、私の名を消し去ってください」(32:32)とモーセは言う。それは、後にパウロが神に語ったのと同様の言葉である。即ち、「実際、私の兄弟、肉による同族のためならば、私のこの身が呪われて、キリストから離れてもいとわない」(ローマ9:3)と。<sup>(6)</sup>

次に、バルトは、出エジプト記32章1～6節に記されている契約破壊(Bundesbruch)について述べる。「モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、さあ、我々に先立って進む神を造ってください。…アロンは彼らに言った。あなたたちの妻、息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、わたしのところに持って来なさい。民は全員、着けていた金の耳輪をはずし、アロンのところに持って来た。彼は、それを受け取ると、のみで型を作り若い雄牛の鑄像を造った。すると彼らは、イスラエルよこれこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だと言った」(32:1～5)。イスラエルは、若い雄牛を作って神として崇めた。この雄牛は、生産力、産出力の象徴である。それは、民俗の力の象徴(Symbol)であり、イスラエルの現在と将来における存在の秘密の象徴であり、自分自身の現在に対する喜びと、また同時に自分たちの将来の理想の象徴である。W.Vischerは、「この牛は、イスラエルを理解してくれる神であり、またこの神において、イスラエルは、自分自身を理解するのであった」と説明する。イスラエルは、このような牛を発明し、建造し、製作することによって、神に対する関係から離れようとしたのではなく、むしろ、その関係を最も深く、忠実にまた慎重に実現しようとしたのである。人々は、牛に対して祭壇を設け、崇拜し、燔祭を供えた。それは、決して何かの「偶像に対する祭儀」(Götzenfest)ではなかった。それは、「主の祭」(ein Fest für Jahve)のはずであった。それは契約の破壊であったが、イスラエルの側から見れば、契約の最高の成就であり、その具体的な敬虔の行為であった、とバルトは注釈する。<sup>(7)</sup>次に、バルトは、モーセの兄アロンについて言及する。アロンは、出エジプト記4章16節によれば、「モーセに代わって民に語る者」であり、それに対して、モーセは「神に代わる」べき者であった。また、アロンは、アマレクとの戦いのとき、祈るモーセの腕を支えていた二人の人のうちの一人であった。彼は、預言者ではなく、制度的祭司職の原型であり、幕屋と聖所を守る者であり、供犠の最高の執行者である。従って、モーセと並んで立つ者ではなく、民と共に立つ人物である。

祭司は、その民の罪の発生とその力に対抗することは出来ない。むしろ反対に、その罪を共に犯すだけでなく、罪の代表者となる。彼は、国民の声に耳を傾け、それに従う。さらに、彼は、国民の心の願いや要求の直接の遂行者となる。祭司的な知恵は、極端な祭司的愚かさという形になって働くということが起こるのである。この伝承は、あの契約破壊のときに、アロンが演じたことを伝えている。

出エジプト記によれば、人間の傲慢とは契約破壊であったとバルトは言う。「神ノ創造者としての人間(der Mensch als creator Dei)、自分を思いのままにし、自分に満足し、従って自分を神とする人間、それが、傲慢な人間の第一の罪の姿であった。「私は恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ」(出エジプト33:19)というのがゆるぎないその御名である神の啓示に照らされたとき、それが人間の姿であった。<sup>(8)</sup>

2. 「主は僕となられた」(der Herr wurde Knecht) ということが、キリスト論の主要な定義である、とバルトは先ず述べてこの項を始める。神は、イエス・キリストにおいて僕となられたのに、人間は、主であろうと欲する。人間は、世界に対しても、人間仲間に対しても、自分自身に対しても、自分の運命に対しても、神との自分の関係に対しても、優越し、それら全体を自分のところから展望し、洞察し、支配し、統治するものとして演ずる。しかし、それは、結局すべて空虚であり、すべて無効なのである。<sup>(9)</sup>そして、バルトは、人間がそのようなものであることを覆うているその隠蔽に注意しなければ

ならないと言う。また、バルトは、創世記3章の蛇の言葉は、極めて痛切な仕方で隠蔽を暗示していると言う。蛇の言葉は、人間が自分に相応しいもの、自分が当然所有すべきものについて、自分の力で判断し更にまた行動するという、人間そのものに提供された、必然性という主題の回りを廻っているのである。

それは、まず第一に、「園にあるどの木からも取って食べるな、とほんとうに神が言われたのですか」と言う、一般的な問いから始まる。これは、「憐れな人間は、楽園とその果実の真只中にありながら、飢えるというようなことに、甘んじなければならないのか」と、問うのである。そのように語りかけられた女は、極めて正当主義的に、「否」と答えたはずである。「私たちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました」。しかしバルトは、すでにこのような会話と同時に、決定的なことが起こったという。即ち、神は人間に相応しくないこと、人間のためにならないことを命じたのかもしれない。その結果、人間は自分の事柄を神に対抗して、自分の手の中に取らねばならぬかも知れない、という思考の蛇的可能性が、現れ出てくるのである。そして、人が蛇に答弁を引き受けるようになるや否や、蛇は、危険なほどに賢明になるのである。この混沌の動物である蛇は主なる神が造られたあらゆる野の動物よりも賢いばかりか、人間よりも賢いのである。ヨハネの手紙二10節以下によれば、挨拶さえしてはならない相手がいる、「そのような者に挨拶する人は、その悪い行いに加わるのです」。楽園の蛇は、そのような挨拶さえしてはならない相手の総括 (Inbegriff) であるとバルトは解釈する。<sup>(44)</sup>しかし、今やすでに挨拶は、なされて、人間の正当的な答えに対する破壊は、その答えに続いて起こらざるを得なかった。蛇は、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べるとあなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」と言う。従って、神の恵みはある程度は十分であるけれども、実際は完全に十分ではなく、神はやはり何か悪意のある過酷な主であり、人間に対して様々のものを与えはするが、最上のものは与えず、この最も良いものについて人間をあやつり、否、それどころか間違った指導をし、最も美しい約束が人間を待っているときに、脅かしの言葉を語ったと、蛇は言うのである。彼女は、「その実を取って食べ、また共にいた夫にも与えたので、彼も食べた」。今や、人間は自分を主とする。というよりも、むしろ、主を演ずる。しかし、その場合、何が悪いことなのであろうか。それは必然的な発展ではないだろうか。従属状態から独立状態への、他律から自律への、当然の脱出ではないだろうか。それこそ真の人間形成ではないのか、という風に解釈し直すことも可能であるとバルトは言う。<sup>(45)</sup>だが、この場合にも、隠蔽は強力である。僕ではなく主でありたいという人間は、自己疎外 (Selbstentfremdung) と自己破壊 (Selbstzerstörung) を犯しているのである。何故なら、神が上に在すのに対して人間は下におり、神が主権を持たれるのに対して人間は従属する。そのような秩序の枠の中でこそ、人間は自由であることを許されるのである。人間は、この秩序を侮り拒む場合には、それは、人間の破滅として起こる他はない。<sup>(46)</sup>バルトは、そのような人間を言い表すために、「高慢」 (Hochmut) という言葉は、極めて弱い。正しい言葉は、「誇大妄想狂」 (Größenwahn) であるかもしれないと言う。<sup>(47)</sup>それはともかく、そのような人間にまで、神は謙られた。神は、人間の企に対して、御自身を低くし、従順と成られたのである。

さて、バルトは、以上の事柄に対して旧約聖書の幾つかの証言から検証する。

先ず、イスラエルの最初の王サウルについてである。サムエル記一8章5節によれば、イスラエルの長老たちが集まって、サムエルに向かって「今ほかの国々のように、われわれを裁く王を、立てて下さい」と言う。サムエルは、王というものが持つ恐るべき特権について警告するが、長老たちは聞き入れない。そこでヤハウエは、「彼らの声に従い、彼らのために王を立てよ」と決定される。バルトは、ここでは次のような事実が明らかになるという。即ち、イスラエルにおける人間の王的存在と働きは、契約の根源的な概念にとっては、疎遠な要素、否、それとは逆行する要素である。嘗ての、士師たちは、神

によって直接召された者であった。彼らは、内外に対して契約を保持する責任があつて、独裁的君主ではなく、イスラエルが苦しんだ苦しみから救うために自由に任命された救助者であった。例えば、ミデアン人との戦いの後で、人々が世襲的な統治者の地位をギデオンに申し出たときに、ギデオンは、「私はあなたがたを治めることはいたしません。また私の子もあなたがたを治めることはいたしません。主があなたがたを治められます」と言ったと言う。イスラエルの伝統において、王という考えはなかった。ヤハウエは、絶対的な権威と力をもって治め、命じ、行動したけれども、それは「melek」（王）としてではなく、偉大な第一次的な解放者、即ち、「moschia」としてである。しかし、イスラエルは、制度的、世襲的な王を期待したのである。事柄は、すでにその出発点から異常なのであるとバルトは解説する。<sup>(17)</sup>

聖書本文の二つの伝承によれば、サウルの誤りは、外面的には極めて些細な過ちであった。第一は（13:7以下）、ペリシテ人との戦いの始めに、サムエルが軍隊のもとに到着するのが遅れ、敵はすでに押し寄せて来たので、サウルは、民が自分を見捨てて四散することを恐れて、自ら燔祭を捧げたのである。サムエルは、サウルの行為を、神の命令に背く愚か者の行為と呼び、その王国は続かないであろうと言う。そこで起ったことはただ、サウルが、神の命令と導きを喜んで待つことをしないで、そして同時にモーセのように民に対して強い人間でありつづけることをしないで、神に対するこの民の関係について、その指導権を自分のものとして奪い、あの犠牲を捧げることによって、自分の服従にとつての決定的な前提を自ら作り出し、それと同時に勝利の戦いにとつての決定的な前提を、自ら作り出そうとした、ということに過ぎなかった。彼は宗教的な点で、僕としてではなく極めて僅かばかり主として振る舞おうとしたに過ぎなかった。<sup>(18)</sup> 第二の伝承は、15章8節以下である。サウルの誤りは、ヤハウエがサムエルの口を通して命じた、アマレク人を全面的に絶滅せよという命令を、サウルは不完全にしか実行しなかったという点である。サウルは、アガグ王の命を許し、敵から奪った家畜のうち値打ちのあるものは大目に見た。サムエルは、サウルのところに来て、「そむくことは古いの罪に等しく、強情は偶像礼拝の罪に等しいからである。あなたが主の言葉を捨てたので、主もまたあなたを捨てて、王の位からしりぞけられた」と言う。サウルは民を恐れてその意志に従ったという告白も、赦しを願う懇願も役に立たない。ここで起こったのは何事であろうか。それは、ただサウルが、他の王たち、国民たち、神々の世界とのたった一つの本当に小さな妥協、全く不合理でも不敬虔でもないような基礎の上に立った妥協を正しいと考えたにすぎない。サウルは、ただ恐怖したにすぎない。しかし、その恐怖のために、やがて独裁者となるのである。あの樂園においても、起こったことは、理論的にはほとんど取るに足らない事柄であった。しかし、それが、人間を樂園において失墜させるには、十分なものであったのである。何故かと言えば、誰が主であり誰が僕かという問題においては、量の多少は問題ではないのである。彼は、最後にはイスカリオテのユダのように自殺する。彼は、この唯一の罪のために棄却され、その罪の結果、止めどもない解体の流れに巻き込まれて、次々に様々の罪を犯したのである。<sup>(19)</sup>

3. イエス・キリストは、神を絶対的に正しいとするために、我々の代わりになられたが、そのことによって、彼は、我々に対して判決（Urteil）を語られたのである。それは、神の行為の謙遜であった。ところが、人間の方は、神を正しいとする代わりに、自ら審判者たろうとすることによって、自分自身に対して不正を行うのである。<sup>(20)</sup>

バルトは、この例証として、創世記3章の蛇の知恵について取り上げる。バルトは、蛇の誘惑は、倫理の基礎づけだと言う。<sup>(21)</sup> 「園の中央にある木に、死の危険があるどころか、むしろその実を食うことによって、人間の目が開けて、彼らも善悪が何であるかを許されるのだから、神のようになる」というのが、蛇が教えたことである。神は、善悪が何であるかを、知っておられる。そして、それを知っているということが、神・主・創造者としての彼の栄光なのである。神は、創造者として、知に基づいて行動し、コスモスとカオスを区別し、光と闇を区別し、秩序と無秩序を区別されたのである。人間は、そのような点で、神と争ってはならないのではないか。<sup>(22)</sup>

隠蔽 (Verdeckung) は、この場合には、明らかに特別に強力である。「善悪の認識」(Erkenntnis des Guten und Bösen) に対する人間の欲求が、創世記3章では明瞭に悪い欲求とされていることに、キリスト教会は、何の躓き (Anstoß) を覚えないということは驚きである。それとも、そのようなところは、読みすぎしてしまったのだろうかと言ふ。もし、善悪の認識を、人間の理性的本性の中にとり、我々の良心の中に求めることをしないで、創世記3章に記されているような事実に注目し、それに従ったならば、キリスト教倫理の理論と実践は、測り知ることのできない結果をもたらしたにちがいない。人間の高慢という真の悪が身を包んでいる殻は、ここでは、他の場所におけるよりも、はるかに厚くまた堅固なのである。

人間は、あの善悪の認識を欲求することによって、自分自身を誤解し、過大評価する。また、その欲求から、客観的な悪も生じる。そして、それらすべてのことの根底には、神観 (Gottesanschauung) と神概念 (Gottesbegriff) との誤謬がある。その誤謬とは何か。まず、神は、その審判者としての職を行われるときに、単なる主権というあの偽りの神的高みには、座わらないという事実である。人間は、その愚かさのために、神をそのように眺めたのである。次に、神は、その栄光を実際に守られたことである。神は、そのことを、凱旋將軍として行ったのではない。むしろ、最も深い苦しみを身に負う、審判者となられた。最後に、御自身の審判者としての職にそのようにして就き、それを司られた神は、その判決そのものについて、審査を受ける必要があるような、またその判決の実施に際して補佐を必要とされるような、審判者ではないという事実である。<sup>[2]</sup>

第3の観点は、神がイエス・キリストにおいて御自身と和解させ、御自身の方へと転向させられた人間の高慢な姿である。神は、その和解の恵みにおいて、そのような、人間のところへと、下りてこられたのである。神がその御子において人間のために為されたのは、そのような人間の冒険と関わっているのである。<sup>[3]</sup>

4. 最後に、人間の高慢を、バルトは、イエス・キリストの「卑下」(Erniedrigung) から、即ち、十字架で、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」と叫ばれた神の子、神の子でありながら真の人として死に葬られた神の子という視点から取り上げる。イエスは、我々の代理となり、我々の罪に対しての審きを忍び、我々の訴訟事件を弁護して、そのようなところまで赴かれた。それが、イエス・キリストにおいて我々のために起こった神の行為の謙遜である。ところが、人間は、自分のためにそのようなところまで下りられた方に対して、はっきりと対立する。彼は、自ら自分を助けることが出来ると考えてきたのである。

バルトは、ここで、人間の隠蔽 (Verdeckung) について、創世記3章の蛇の知恵を再度取り上げる。<sup>[4]</sup> 楽園における憐れな人間たちは、何が善であり何が悪であるかを知らない。善悪について判別することも、彼らには、許されていない。彼らの楽園における生活には、そのような多くの限定と限界がある。勿論、それと同時に、神が自分たちと結ばれた契約についての想起と自分たちは己を助けようとする必要が少しもない家にいるのだという想起もある。それらについて、賢い蛇は、次のようなことを言うのである。まず、そのことは、祝福されたものとしてではなくて苦痛として、意味深いものとしてではなくて不条理なものとして、生命に反するもの、必然的ではなく神の謎のような思いつきによって彼らに与えられていると。次に、そのことは、必然的なものでも決定的なものでもなく、彼ら自身の勇敢な行為によって克服され、除去されるだろうと言うのである。つまり、人間は絶対に自分自身を助けることが出来るのであって、従って神の助けだけに頼るものではないという、反駁の余地のない経験をするためには、あの限界を実際にただ越えさえすれば良いのだと言うことである。<sup>[5]</sup>

このような隠蔽は、罪そのものの一要素であると言ひ、バルトは、次の三つの視点から考察する。

(1) 自助 (Selbsthilfe) の試みは、人間の誤謬に基づいている。自己肯定と能動的主体性及び自立的

責任負担は、神との契約、隣人との交わりの中における人間の存在が、限定の中にあることを承認しようとしなければ、人間そのものを誤認し、否定することになるであろう。即ち、そのような限界の中で、あるがままの者として感謝をもって存在することをしないようになる。

(2) 人間がそのような誤謬を犯すとき、彼は、禍以外のものはそこから生じ得ないような悪を行う。恵みが掟である場合には、従順は何ら苦しい義務ではなく、ただ感謝の中にある自由な喜ばしい行為である。しかし、巨人 (titanische) としての人間は、悪以外のことを行い得ない。彼は、禍を引き起し、行く手は真実の困窮である。また、彼は、誤って不面目と考えられているものに反対するが、その結果は不面目である。あの楽園において、彼らにおいて、「自然的ナモノ」が突然に「恥ズベキモノ」となったのである。そこで、男の憐れな言い訳が始まる。「私と一緒にして下さったあの女が、木から取ってくれたので、私は食べたのです」。そして女も「蛇が私をだましたのです。それで私は食べました」と言い訳をする。聖書は、人間が自分自身を助けようとしたとき、破局的な仕方、助けを失ったのである。<sup>(6)</sup>

(3) 決定的な誤解は、神についての誤解である。神は、ゼウスのような専制君主 (Despot) ではない。むしろ、永遠の昔から人間の神であり、その力は徹頭徹尾人間に与えられる恵みの力であるような神である。神の恵みの全能は、人間の自由を少しも損なうものではなく、反対に、人間の自由の基礎を与えるのである。バルトは、人間の傲慢で自主的、不信、危険、従って禁ぜられている自助の姿を、二王国の最後の歴史から考察する。

先ず、預言者は神の審きを宣教した。即ち、イスラエルが絶えず繰り返し示した不信実や、神の契約相手方であることを彼らがやめたこと、神の選びの民であることをやめたことに対して、「独立した民族及び国としての従来からの汝らの状態は終わりとなり、全く打ち破られる」と預言者は告げた。イザヤは、アッシリアの王ティグラート・ピレセルを、「怒りの杖」「憤りの鞭」と称んでいる (イザヤ10:5)。後には、バビロンの王ネブカデネザルを、ヤーウエの僕と称び、彼の手には、イスラエルを囲むすべての国々も、イスラエル自身をも与えるとエレミヤは語る (エレミヤ27:5)。預言者は、何時も悔い改めを警告しながら、次第に迫ってくるイスラエルの両王国の最後を告げ、その王たちと民たちに、この最後を押し留める力のないことを告げ、そのような無力を告白してこの最後を受け入れる必要を告げたのである。預言者は、自ら自分を助けようとする試みを断乎とした態度で、罪の繰り返しと名付け、それに対して裁きが与えられると、語った。ところが、驚くべきことであるが、彼らがそのように告げても、その言葉をイスラエルはいつも聞かず、それに対する服従は起こらなかったのである。

さて、エレミヤの役割と働きを、神の審きの光の中に照らして見ると、彼は、旧約聖書の只中におけるイエス・キリストの証人であったとバルトは言う。<sup>(7)</sup> エレミヤは、バビロンがエルサレムを侵略したときに、監視の庭で発見され、鎖につながれて追放される人々の中にいたのである。ネブカデネザルは命令して無条件で彼を釈放した (エレミヤ40:1~6)。「こうして彼は民のうちにいた」(39:14)。これは一時的ではあったが、希望に満ちた状態が来たように見えた。何故なら、「カルデヤ人に仕えることを恐れるに及ばない。この地に住んでバビロンの王に仕えるならば、あなたがたは幸福になる。あなた方は、ぶどう酒や夏のくだもの、油を集めて、それを器にたくわえ、あなたがたの獲た町に住みなさい」(40:9~10)と言われたからである。このようにして、集められた残存者たちは、かつては軽んじていた謙遜による新しい従順を捧げて、自分たちがヤーウエの民であることを示すように見えた。ところが、ダビデ王家の一人であるイシマエルの指導によって反動を起こすのである。しかし、この反動は、強引に鎮圧された (41:11~15)。彼らは、バビロニア人の総督によって復讐されるのを恐れて、エジプトへ移住しようと決心するわけである (41:16~18)。そこで、人々はエレミヤに執り成しの祈りを求める (42:1~2)。これに対してエレミヤは神の決定として次のように告げる。「もしあなたがたがこの地に留まるならば、私はあなたがたを建てて倒すことなく、あなたがたを植えて抜くことをしない。私はあなた方に災いを下したことを悔いているからである。主は言われる。あなたが恐れているバビロンの王を恐れてはならない。私が共にいて、あなた方を救い、彼の手から助け出すからである。私はあなた方



を憐れみ、また彼にあなた方を憐れませ、あなた方を自分の地に留まらせる」(42:10～)。しかし、「もしあなたが、むりにエジプトへ行って、そこに住むならば、あなた方の恐れている剣は、エジプトの地であなた方に追いつき、あなた方の恐れている飢餓は、すぐあとを追ってエジプトまで行き、その所であなた方は死ぬ」(42:15～16)。しかし、かつてはエルサレムの王と民とが、自分たちに語られた言葉を聞かなかったように、残っている者たちも、この言葉を聞くことが出来なかった。また、聞こうとしなかった。彼らは、「あなたは偽りを言っている。われわれの神、主が『エジプトへ行ってそこに住むな』と言わせるために、あなたを遣わされたのではない」(43:2)と言うのであった。そして、「あなたが主の名によって私たちに述べられた言葉は、私たちは聞くことが出来ません」(44:16)と傲然と反対する。彼らの自助とイスラエルの及びユダ全体の自助が、根本的にいつもどういう意味を持っていたかということは、このことによって明らかであるとバルトは言う。<sup>94</sup> エレミヤは、彼の友人バルクに次のように語った。「ああ、私はわざわいだ。主が私の苦しみに悲しみをお加えになった。私は嘆き疲れて、安息が得られない」(45:3)と。この苦しみの叫びで吐露されているのは、エレミヤの苦悩である。彼がただひとりで引受け遂行してきた委託の重さであ、その内容の特殊性と厳しさであり、それに従事しても無効であったという事実であり、その出来事に対して彼自身が参与してもそこに何の助けも与えられないという事実である。それらすべてのことは、ヤーウエによって彼に与えられたことである。バルトは、このエレミヤの姿を、他の者たちの代理をしているのではないかと言う。<sup>95</sup> そして、イスラエルも選出された民族であるが、それは神の言葉、意志、業の証人となるため、しかも自分が無能であり、失敗するために選ばれたのである。エレミヤは、単に自分自身のために、また自分の名において嘆いたのではなく、自分の民族の身において、この選ばれた神の相手方としての人間全体を代表して、嘆いたのである。彼は、罪ある民族としてのその存在と状況と連帯関係にある人と見なくてはならない。この民族にその自助の不成功を告げ知らせる彼が、自分自身を助けることに成功した人であったなどということが、どうしてあるであろうか。<sup>96</sup>

## 注

- (1) Karl Barth 『Kirchliche Dogmatik』 IV/1 s.459 井上良雄訳 102頁
- (2) a.a.o. s.459 上掲書 103頁
- (3) a.a.o. s.460 上掲書 104頁
- (4) a.a.o. s.465 上掲書 112頁
- (5) a.a.o. s.467 上掲書 116頁
- (6) a.a.o. s.467 上掲書 117頁
- (7) a.a.o. s.469 上掲書 120頁
- (8) a.a.o. s.470 上掲書 121頁
- (9) a.a.o. s.471 上掲書 122頁
- (10) a.a.o. s.472 上掲書 124頁
- (11) a.a.o. s.475 上掲書 129頁
- (12) a.a.o. s.479 上掲書 136頁
- (13) a.a.o. s.481 上掲書 138頁
- (14) a.a.o. s.482 上掲書 140頁
- (15) a.a.o. s.483 上掲書 142頁
- (16) a.a.o. s.485 上掲書 145頁
- (17) a.a.o. s.487 上掲書 148頁
- (18) a.a.o. s.493 上掲書 157頁
- (19) a.a.o. s.494 上掲書 159頁

(20)	a.a.o. s.494	上掲書	160頁
(21)	a.a.o. s.497	上掲書	164頁
(22)	a.a.o. s.498	上掲書	165頁
(23)	a.a.o. s.503	上掲書	173頁
(24)	a.a.o. s.514	上掲書	190頁
(25)	a.a.o. s.515	上掲書	191頁
(26)	a.a.o. s.518	上掲書	197頁
(27)	a.a.o. s.526	上掲書	208頁
(28)	a.a.o. s.528	上掲書	210頁
(29)	a.a.o. s.528	上掲書	212頁
(30)	a.a.o. s.529	上掲書	214頁

#### 四. 人間の怠慢

「Der Mensch der Sünde im spiegel des Gehorsams des Sohnes Gottes」が前項における罪の認識であった。此の項は、「Der Mensch der Sünde im Licht der Herrschaft des Menschensohnes」、人の子の支配の光に照らされた罪の人間を明らかにすることである。十字架につけられたイエス・キリストの甦りにおいて明確にされた罪とは何か。即ち、イエス・キリストにおいて示された新しき人に基づいて見た場合、古き人の行為とは何か。それは、自分の自由を用いようとせず、自己閉鎖的存在の低地に満足しようとする人間である。人は、そうすることによって、取り返しようなない仕方で、根本的、全面的に、自分自身の愚かさ、非人間性、墮落に服し、自分自身を死に引き渡したのである。その場合の人間の罪を、バルトは、怠慢 (Trägheit) と言う。<sup>(1)</sup> 或いは、「眠たげな状態」(Schläfrigkeit)、「鈍重」(Faulheit)、「遅鈍」(Schwerfälligkeit) という言葉でも表現できる。これらの言葉によって言い表わしたいのは、絶対に禁じられた排除すべき悪しき「不履行」(Unterlassen) ということである。プロメテウスのような英雄的な罪も存在する。それは、バルトによれば、僕となられた神の子の姿から見た場合、人間の罪は、高慢であった。しかし、罪は、単に高慢という姿を持っているだけではなく、それとは反対に、怠慢という平凡をも持っているのである。

怠慢とは何か。バルトは、神の訓令に対する不従順 (Ungehorsam) であると言う。<sup>(2)</sup> この罪は、不信仰という深い定義も含まれているのである。何故なら、怠慢という姿での罪は、人間イエスに対する拒否に結晶するからである。神に対する人間の拒否は、何らかの敬虔深さを持って行われる。即ち、人間の敬虔深さにおいてこそ、神に対する拒否と除去が行われ、人は、人間イエスの現実存在における神の現実、現臨、活動を決して受け入れない。敬虔深い人間、宗教的な人間こそ、必然的に神の前から後退するものである。それは、神に対して必然的に反抗し、神との関係において自分自身の中に閉じこもり、自分であることに満足し、それを楽しんでいる怠慢な人間となるからである。<sup>(3)</sup> バルトは、神に対する拒否 (Versagen) の姿を四項目にわたって展開する。

##### 1. 神とのその関係における拒絶 (Versagen)

神の永遠の言葉は、肉となり、人間イエスの現実存在において、人間の形で、我々人間に語られた。我々は、このイエスにおいて、神の言葉に接するのである。即ち、彼が歴史において語り、行動し、十字架の死によって宣べ伝えた言葉に接するのである。我々は、この神の恵みを感謝して受け、神の訓令によって賢明になるように創られた。ところが、人は、この自由を用いることをしない。神についての無知にとどまり、不明と愚かさにと愚鈍に固執する。バルトは、この愚鈍の罪について、聖書から例証する。

聖書が「愚かな」(nabal) 或いは「愚か者」(chesil) について語る場合、例えば、『詩篇』14章1節で

「心のうちに『神はない』という人々」について語る場合、知的な能力や理解力や思考力について語っているのではない。『マタイ』11章25節では「幼な子のように」と記されている。聖書概念による人間の愚かさとは、彼の能力や教養がどうであるにしても、神の啓示と言葉とによる証明なしにでも済ませると考え、むしろそれに反対すべきだと考えて、そのようにして生じた真空に基づいて生き、根本的に顛倒した原理と根拠に基づいて生き、自分の誤った前提から出発し、誤った方法に従って生きることである。従って、カンタベリアのアンセルムスが、神の存在証明の最初の部分で語っている『詩篇』14章1節の「神なしという者」を、「無知ナ者」(ignorans)としてではなく「愚カナ者」(insipiens)と紹介しているのは正しいとバルトは言う。<sup>(4)</sup> 従って、人は、愚かさというものが、人間の怠慢の基本的な次元として、罪であるということを理解しなければならない。何故なら、それは、神に対する不従順、不信仰、無感謝となるからである。アダムとその妻が、神の言葉と戒命に満足せず、何が善であり悪であるかを自ら知ろうとしたときに、それは、彼らの不従順であると同時に、善と悪とを取り違えて混乱させる愚かさの第一歩であったのである。

更に、愚かさとは、その徴候や果実によってはじめて罪なのではなく、先ずその根において罪なのである。それは、人が、神の認識の中であって、即ち、神の現実及び、現臨と活動の明るい光の中であって、神によって徹底的に知られながら、彼は、神を認識し、その認識の中に生きることを拒むことである。そのような自己放棄こそ、人間の愚かさにおける真に愚かな本質である。<sup>(5)</sup> 聖書には、「この世の知恵」もそれなりに、典型的な意義を持っていることを教えているとバルトは述べる。例えば、パウロは、『ピリピ書』4章8節でキリスト者は、「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべて誉れあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものを、心にとめなさい」と教える。また、『ルカ』16章8節では、主御自身があの「不正な家令」の極めて世俗的な処世術を、この世の子らは、光の子よりも利口であると賞賛している。

ゲートルは、『コリント一』3章18節以下の言葉「だれも自分自身を欺いてはならない。もしあなた方のうちに、自分がこの世の知者だと思ふ人がいるなら、その人は知者になるために愚かになるがよい。なぜなら、この世の知恵は、神の前では愚かなものだからである」に立腹して、もしその通りであれば、人生は生きるに値しないと考えた。バルトは、それは、恐らくゲートルは、分別のないキリスト者に出会ったためではないか、と言う。<sup>(6)</sup>

しかし、バルトは単純にこの世の智恵を肯定しない。彼は、次のように言う。この世の知恵は、神の認識が何かの形で挑戦的に彼に迫る場合には、それを、無意味なこと、不条理なこと、「愚かなもの」(コリント一1章18節)と思うのである。その際、「不正によって」神の智恵と自称する分別のないキリスト者の高慢によって、自分は承認されていると彼が感じる場合には、彼にとってはいよいよ都合である。彼は巧みに、神の認識に対して身を隠すのである。しかし、どのような効果的な隠蔽であっても、その智恵と称しているものの背後に隠れた人間の愚かさが、あらゆる方向に向かって発揮されるという点に、何の変わりはない。自分は神を充分によく知っていると主張する。しかし、それは、刑罰(ungestraft)なしには出来ない。その刑罰とは何か。

(1) 先ず、神の認識において、人の存在に人間性という性格を与える結合(Bindung)が、即ち、人間仲間に対する結合が、人から必然的に失われる。神はこの結合を保証する方である。隣人と人の関係の秩序は、神に対する人の関係の中に、その背柱(Rückgrat)を持っている。隣人に対するその関係の秩序は、神に対する関係なしには、存在し得ないのである。隣人に対する神的対向者(göttliches Gegenüber)についての知識、また三一の神が、従って自分自身の内部において孤立的ではない神が、対向者であるという事実についての知識が、人間という対向者の不可欠・価値・約束・要求についての知識の必然的前提である。しかし、愚かな者には、そのような知識が欠けている。人は、自分自身の智恵で、そのような知識に代わることが出来るかと考えるのである。もし神が自分の父であることを拒否するならば、ど

うして、人は人間の中に、自分の兄弟を見い出すであろうか。垂直の次元において彼が閉鎖されているならば、必然的に、水平の次元においても閉鎖され、孤立することになる。そのようなものは、共同人間生 (Mitmenschlichkeit) ではない。それは、一人の人間が他の人間を見、理解するということがなく、人間仲間に対して上位に立つということになる。神についての知識がなければ、人間と人間との意味深い共存もなく、真の共働も、真の共苦もなく、真の共楽もなく、真の結合もない。人間中間でない人間は、非人間 (Unmensch) である。あの「いと高きところでは、神に栄光があるように」という声が響かない真空 (Vakuum) からは、地上の平和に対する最も真剣な憧憬も、最も声高な叫びも、新しい分裂へと、導くに違いない。(7)

(2) しかし、あの真空によっては、人間存在の精神的及び心的要素と身体的及び自然的要素の間の二元論 (Dualismus) が避けられない。神は、その統一を保証される。神は、人間を秩序ある統一の中に人を創造されたのである。神は、人を単に心とか単に身体でもなく、全人間そのものを保証されるのである。秩序を失った人間を秩序を持つ人間に変えるという問題は、あの真空を取り除くという問題であり、人間が神を理解しようとせず、あらゆる隠蔽にもかかわらず自分自身をも理解出来ないという、あの第一次的な愚かさを取り除くという問題である。(8)

(3) さて、人の根本的な不履行 (Grudunterlassung) とあらゆる隠蔽 (Verdeckung) によって、その存在の限界づけられた時間性 (begrenzten Zeitlichkeit) に対する人間の顛倒した態度が、必然的に生じる。神は主であり、あらゆる一人一人の人間の時間を保証する方であられる。そして、神に対する人間の関係は、あらゆる社会的・個人的生活の意義であり、歴史の意義であり、人間の過去、現在・将来の意義である。我々が神から来たって神に赴くのでなければ、何処から来て、何処へ行くのであろうか。神は、それに対する唯一の答である。愚か者の愚かさは、神を知ろうとしないために、そのような答えが彼にとって何の重さもない点なのである。これが、あの真空の結果として、人間の根本的な愚かさの帰結として洞察すべき第三の事実である。(9) 神は、そのような人間の罪を知りつつ、受け入れられたのである。次にバルトは、この事実を聖書から例証する。

『箴言』で愚か者とは、「自分の心を頼む者」(28:26)、「忠言を聞く必要も感じないで自分の道を正しいと思う者」(12:15)、「彼は悪を用心しない」(14:16)、「彼は愚かなことを喜び」(15:12)、「愚かさを花の冠とし」(14:24)、「愚かな者も黙っているときは、智恵ある者と思われ、そのくちびるを閉じている時は、さとき者と思われる」(17:28)、「すべて愚かな者は怒り争う」(20:3)、「石は重く、砂も軽くはない。しかし愚か者の怒りは、この二つよりも重い」(27:3)。

『伝道の書』「愚者のくちびるは、その身を滅ぼす。愚者の口の言葉の初めは愚痴である。またその言葉の終わりは悪い狂気である」(10:12以下)、「賢い者の戒めを聞くのは、愚かな者の歌を聞くにまさる。愚かな者の笑いは、かまの下に燃えるばらの音のようである」(7:5以下)。

これらの文書には、極めて具体的な事が記されている。しかし、単に、賢い者が愚かな者に対して立っているというのではなく、彼らは連带的に結合されているのである。愚かさとは、イスラエルの事柄である。彼らは、神に対する関係において愚かな者としてしか、その預言者たちによって語りかけられなかった。愚かさとは、イスラエルの歴史の光の中へ、即ち、イスラエルの歴史を支配される神の歴史の中へ歩み入る諸民族の事柄でもある。また、愚かさとは、神の審きの中に示される一人一人の人間の事柄である。従って、愚か者の像は、彼らには当然の棄却としてすべての者に差し向けられた鏡である。従って神の恵みの選びと神の懲らしめる力強い御言葉がなければ、誰も逃れることは出来ない。

バルトは、『伝道の書』と『箴言』を誤解することの警告として理解しなければならないと述べて、先ず、『伝道の書』7章16~18節を聞かなくてはならないと言う。「あなたは義に過ぎてはならない。また

賢きに過ぎてはならない。あなたはどのように自分を滅ぼしてよかろうか。悪に過ぎてはならない。また愚かであってはならない。あなたはどのように自分の時がこないのに死んでよかろうか。あなたがこれを執るのはよい。また彼から手を引いてはならない。神をかしこむ者は、このすべてから逃れ出るのである」。次に、『箴言』30章2節以下のヤケの子アグルの驚くべき言葉にも注意しなければならない。「わたしは確かに人よりも愚かであり、わたしには人の悟りが無い。わたしはまだ知恵をならうことができず、また、聖なる者を悟ることもできない。天にのぼったり、下ったりしたのはだれか、風をこぶしの中に集めたのはだれか、水を着物に包んだのはだれか、地のすべての限界を定めた者はだれか、その名は何か、その子の名は何か。」<sup>10)</sup>

さて、愚か者と賢き者について、決定的な注目すべき箇所がある。それは、『サムエル記一』25章である。ここには、ナバル(愚か者の意)と知恵を代表する妻アビガイルが対比され、神の約束の代表であるダビデが登場する。この物語の中心は、約束の担い手であるダビデと、明白に愚かな一人の人間との出会いと、明白に賢い人間との出会いである。この物語の中心は、ナバルという愚か者によってダビデが拒否され、アビガイルという賢い者によってダビデが承認され謙遜に受け容れられたという出来事である。

舞台は、ヘブロン<sup>11)</sup>の東南カルメルである。此処に裕福なナバルが暮らしていて、羊毛刈りの祭りを祝おうとしていた。そこへ、サウルの追跡を逃れて来たダビデが、十人の若者をナバルのもとに派遣し、自分の兄弟として、「どうぞあなたに平安があるように、あなたの家に平安があるように、またあなたのすべての持ち物に平安があるように」(6節)と言わせた。ところが、ナバルは、その名が示す通りの者で、ダビデの従者に、「ダビデとはだれか。エッサイの子とはだれか。このごろは、主人を捨てて逃げる僕が多い。どうしてわたしにパンと水、またわたしの羊の毛を切る人々のためにほふった肉をとって、どこからきたのかわからない人々に与えることができようか」と答えた。ナバルの愚かさとは何か。それは、この言葉が、異常なほどの自惚れを持ち、その上我慢のならないほど道徳家ぶったブルジョアの言葉だという点にあるのだろうか。確かに、その点にもある。しかし、それだけに留まるならば、この物語を、道徳的に読むことになると、バルトは警告する。<sup>12)</sup> 後で、アビガイルは、ダビデという名を聞くや否や、全く別の反応を示す。ナバルの愚かさの決定的な問題点は、彼の言葉の始めと終わりにある。ナバルが軽蔑し、嘲笑した相手は、ベドウインの尊長というような者ではなく、ヤハウエによって選ばれた者である。ナバルは、そのダビデを主人から逃げた僕ではないかと疑い、不親切にも飲食物を惜んで拒絶したのである。ダビデが彼に三度「平安があるように」(Schalom)と言って挨拶しているのを聞きのがしてしまった。彼は、救いとの出会いを、全イスラエルの救いとの出会いを、粗野な衝突へと転化してしまったのである。彼は、ヤハウエと出会い、ヤハウエをまったく知らぬ者として振る舞い、従って我慢ならぬ男として振る舞った。

ところで、ダビデも正義の名のもとに、愚かな反応を示すのである。彼は、従者600人のうち、剣を帯びた400人と共に復讐しようと出掛けたのである。だが、ここに、「賢くて美しい」アビガイルが登場する。彼女は、ダビデという名を聞いて、自分が当面しているのが誰かということを知り、即刻その状況を洞察し、それに応じて行動した。即ち、彼女は、パン二百、葡萄酒の革袋二つ、調理した羊五頭、いり麦五セア、乾葡萄五房と乾いちじくの塊を驢馬にのせる。そして、2・3名の若者たちを自分の前に行かせ、自分も一頭の驢馬に乗って、彼らの後からついて、ダビデの方へと進んで行く。しかも、それらのことを、夫のナバルには一言も告げずにするのである。神に選ばれた人が近づき、彼と共に審きが近づく時に、知恵はまず愚かさ<sup>13)</sup>と討議することをしないで、愚かさの傍らを通り過ぎて直接進み、命ぜられたことをするのである。

そこで、ダビデとアビガイルの出会いが起こる。アビガイルはダビデを見て、急いで、驢馬を降り、ダビデの前で地にひれ伏し、その足もとに伏した。バルトはこの有り様を、次のように解説する。「アブ

ラハムが神の前で行ったような」(創世記17:3)、「ヨシュヤが神の使いの前で行ったような」(ヨシュヤ記5:14) 絶対的畏敬の態度である。<sup>(42)</sup> アビガイルの賢さは、夫ナバルの悪を償うだけではない。彼女は、ダビデが今、行おうとしている復讐という悪をも、防ぐことにある。彼女は、「わが君よ、どうぞ、このよこしまな人ナバルのことを気かけないでください。あの人はその名のとおりで。名はナバルで、愚か者です」(25節)と言うのである。ヤハウエに選ばれた者は、自分自身の復讐者として行動することは許されない。アビガイルは、ダビデに対して、卓越した姿で立っていたのである。ダビデはどのように答えただろうか。「ダビデはアビガイルが携えてきた物をその手から受けて、彼女に言った。『あなたは無事にのぼって、家に帰りなさい。わたしはあなたの声を聞き入れ(あなたの人格とあなたの仲介を顧慮して)あなたの願いを許します』」(35節)、「きょう、あなたをつかわして、わたしを迎えさせられたイスラエルの神、主はほむべきかな。あなたの知恵はほむべきかな。またあなたはほむべきかな。あなたは、きょう、わたしがきて血を流し、手ずからあだを報いることをとどめられたのです」(32節以下)。

この物語は、二つの結末がある。第一は、ナバルは、ダビデの復讐から逃れはしたが、破滅して消えてゆく。第二は、ダビデとアビガイルは結婚するのである。バルトは、この物語を、救済史の必然性の特徴を示すものと解釈してこの第一項を終える。<sup>(43)</sup>

## 2. 人間仲間とその関係における拒絶

次に、人の子の支配の光において考察する人間を、バルトは、非人間性という術語で展開する。非人間性(Unmenschlichkeit)とは、人間仲間(Mitmenschen)との関係なしに生きることである。神が肉となられたのは、人間仲間となり、人間の隣人となり、兄弟となられたことであった。それによって、人間も、単に神との交わりの中に生きるだけでなく、同時に他の人間との交わりの中に生きるためである。しかし、人はこの神の召還に従うことを履行しない。人が、他の隣人と共に生きることをしない場合、以下のような危険性が明らかになる。それは、権勢(Gewalt)という性格を持ち、不気味な仕方、他の人々に対して一段と強者になる。彼がもし、一国を支配すれば、他の人を抑圧し、その人の価値・誉れ・権利を傷つけ、最後は戦争で終点に達する。<sup>(44)</sup> ここで、バルトは、あの独裁者を想定しているように思える。

さて、バルトは、またもや、人間が非人間性となる隠蔽(Verdeckung)について三項目にわたって言及する。

(1) 非人間性は、人間との結びつきが賭けられ致命的な危険にさらされると共に、直ちに神との結びつきも同じ運命に陥る。人間仲間に対する関係の解消は、神に対する関係の解消であった。その愚かさは、非人間性の必然的帰結でもある。その場合には、「神を愛していると言いながら、兄弟を憎む者は、偽りである。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない」(ヨハネー4:20)という御言葉が妥当する。もし主の祈りの導きによって、神を我らの神として、その民の神として認識し、崇め、愛するのでなければ、人は、神を私の神として愛することは出来ない。もし人が隣人を軽蔑するならば、もし人が隣人から只利益を引き出す者であれば、必ず、神を利用するであろう。人間仲間なしの神は、一つの幻想であり、一つの神話であり、たといそれが聖書の神であり、ヤハウエと呼ばれ、イエス・キリストの父と呼ばれようとも、それは、一つの偶像である。<sup>(45)</sup>

(2) 人間の非人間性からは、そのからだの魂としてのその人間的本質の構造と秩序の崩壊へと、道が直接に通じている。汝なしの我は、我ではあり得ないし、我ではないのである。人は、その本質からして、他の人間との共存においてだけ、人間として保証されるのである。もし、人が、人間仲間を助けようとせず、無関心であるならば、彼は、自分自身を喪失し破滅する。

(3) 非人間の本質が、その限られた時間的継続によって性格づけられた人間の生活は、どこ迄及ぶか、「その過ぎ去ることは速く、われらは飛び去るのです」(詩篇90:10)という問題である。人間の生活は

どのようにして過ぎ去るのであろうか。我々が生活を終えた時に、神の前に置かれたもの、神の審きの中に置かれるもの、それは、その人の歴史 (Geschichte) である。人は、彼の同時代人と関係を持つ、即ち、彼と共に歩んでいた年老いた人々、また、若い人々と関係を持つ、彼の歴史である。もし彼が、自分の歴史において、彼の人間仲間を拒否 (versagen) するならば、彼は、その時間の中で、何であったのであろう。その場合には、彼は、何のために生きて来たのであろう。何のために生き、また働くための場所が与えられていたものであろう。また人は、どのようにして、神の前に、また神の審きの中に立つのであろう。<sup>(66)</sup>

人間は、この一人の方 (イエス) に基づいて見れば、神に対する関係においても、その人間仲間に対する関係においても、そのような怠慢者 (Träge)、悪しき拒絶者 (Versager) なのである。神は、そのような人間の罪にもかかわらず、憐れむのである。そして、その和解において行われるのは、その非人間性の中からの人間の高揚 (Erhebung) である。

バルトは、以上の状況を、預言者アモスの審きの使信の光に照らされたイスラエルの罪から取り上げる。

アモスが宣べ伝える災い、即ち、北王国及びその民の没落は、決定的・全面的である。『見よ、わたしは麦束をいっぱい積んだ車が物を圧するように、あなたがたをその所で圧する。速く走る者も逃げ場を失い、強い者もその力をふるうことができず、勇士もその命を救うことができない…』と主は言われる。このように語った預言者は、アモス以前には誰もいなかった。エリヤもそのようなことを語らなかった。アモスの使信の特質は、北イスラエルに対する告発に基づいて行っている点にある。告発の内容は、ヤラベアム王のバアル礼拝や人格についてではない。ヤハウエの怒りの爆発を告げ、社会の終焉を告げねばならなかったのは、この国を支配している社会的状態の非人間性であった。そこでは、人間は、人間と共に生きて交わることをしていない、この一点だけである。そのようなことは、明らかに、これまで出現した預言者たちも、その弟子たちも、語らないことであったと、バルトは解説する。<sup>(67)</sup> アモスは、ヤハウエを、人間によって侮辱され卑しめられ圧迫された人間仲間の神として宣べ伝え、そのような人間仲間に対して加えられた事柄のために、直接の容赦ない行動へと呼び出された懲罰者として語ったのである。

さて、バルトは、アモスの告発を理解するためには、預言者は、政治家でも社会政策家でもないということに注意しなければならないと言う。<sup>(68)</sup> 政治家や社会政策家ならば、利益のために、幻想 (Visionen) を持たないのが常である。しかし、預言者は、幻想を持つ。そして、それに応じて、自分を取り巻く歴史的現実を、彼は、事物を神の目で見ることを許されているのであるから、事物の根底を眺め、事物に相応しい名前を与える。では、当時アモスが見たものは何であったのだろうか。

第一に、彼は、人々の繁栄と積み上げた宝 (3:10)、豪華な家と安楽な生活 (3:15)、を見た。しかし、アモスは、近代の生活改善の豪華な美食や酒宴そのものを攻撃しているのではない。確かに、そのような攻撃も含まれているかもしれない。だが、聖書本文には、そのような非難のどの一つも単独で記されておらず、従って独立した重要性を持っていないとバルトは言う。<sup>(69)</sup>

第二にアモスが見たのは、富裕な者たちとは対照的な光景である。即ち、高い所で裕福な生活をしている者たちによって、次第に深い闇の中に落とされる状況を見たのである。恵まれず弱い人々を、恵まれた境遇にあり輝かしい一段優れた群れである者が、そのように突き落とすということこそ、アモスにとっての問題点であり、ヤハウエ御自身の問題点であった。富裕な者たちの境遇の裏面はどのような有り様だったか。その誇らしげな建物はどのような基礎の上に建てられていたのか。そこでは正しい人が、負債を払えないというので、金で奴隷に売られる。貧しい者が、靴一足の金のために売られる (2:6)。富裕な者たちは、手に入れた金で、酒を飲み、質にとった衣服の上に身を伸ばしている (2:8)。アモスは叫ぶ。『彼らは正義を行うことを知らず、しえたげ取った物と奪い取った物とをそのもろもろの宮

殿にたくわえている』(3:9以下)。

アモスの使信は、人間の非人間性については、次のような答えしか、神から与えられない。即ち、人間の非人間性は、人間の愚かさと同様に、ただ排除されるべきものである、という答えである。<sup>(20)</sup>

### 3. 被造物的構造との関係における拒絶

バルトは、此の項で、人間イエスにおける真の人間の生について取り上げる。イエスは神に全面的に身を向け、かつ人間に向けて生きられた。彼は、肉でありつつ、霊によって生きられたのである (Er lebt nach dem Geist, indem er Fleisch ist)。彼の聖霊を受ける者は、彼の人間的本性の真理すなわち真に人間的な生へと選ばれ・創られ・定められた者であることを認識するであろう。しかし、人は、彼において自分に贈られた肉における霊の自由を用いることを履行せず怠った。人は、動くことを許されている時に動かないで、霊のない肉としての存在の中に、無秩序の中に留まり、それに相応しい生活をする。バルトは、そのような生活を、「愚かさ」(Dummheit) 及び「非人間性」(Unmenschlichkeit) と前に用いた概念に対応して、「淪落」(Verlotterung) と名付ける。<sup>(21)</sup>淪落とは、荒廃し、投げやりのために無秩序に陥り、破滅し、そのために零落することである。人は、人間であることをやめるほどに、零落することは出来ない。しかし、人間の怠慢は、それが人間の零落としてどのように醜いものであるにしても、否定出来ない事実である。人は、神を認識しようせず、人間仲間なしに生きようとするのと同じように、自分の本性の無秩序・分裂・崩壊を欲し、イエスの訓令 (Weisung) において与えられ贈られた一人の完全な人間であるという自由を用いることを怠った。人は、神の恵みを指定した場所から滑り落ちることによって、零落する。真の人間として生きることは、規律 (Disziplin) の中に留まるということであるが、怠慢 (ここでは零落) としての罪は、規律を持たないということである。我々全ての者の中には一人の浮浪人 (Vagabund) がいて、規律を受け容れないのである。何故、規律を受け容れないか。そこには、「彼は面白い」・「彼は魅力を持ち」・「人の心を奪い」・「うっとりさせる」、快楽 (Lust) の力があるからである。それは、純粹と考えられる精神生活ないし内面的生活を営み、学問的な思想世界或いは美的また宗教的な幻想世界を打ち立てることであろう。それが、悪しき快楽の力であるということ、それもやはり、この世の快楽の一定の形にすぎないということ、人の零落の一つの姿にすぎないということ、それが怠慢であり、罪であるということ、一度この快楽の虜になった場合には、人は、もはや、耳を傾けない。

バルトは、ここにおいても、隠蔽の問題を考察しなければ、このような形における罪の問題を正しく理解することは出来ないと言う。<sup>(22)</sup>何故なら、此処にこそ、その他におけるよりも、一層有効な仕方、罪を、カムフラージュすることが出来るからである。罪の偽装、従って罪の隠蔽は、この場合にも、罪とは正反対のものという名のもとに、行われる。人は、自由と自然性という二重の口実で擁護するのである。一方では精神化され、他方では物質化された存在の仕方を、自然性への復帰として説明する。ここでは、霊が人に要求し、期待するあの規律は、結局は麻痺に陥り、自己欺瞞に終わるのである。

さて、バルトは、例証として、『サムエル記二』11章～12章における、ダビデとバテシバの物語を取り上げる。この物語は、ダビデが王位についた後の偉大な業績を述べている脈絡の中で、一つの異物を形作っていて、極めて悲痛であるが、約束に充ちていて、抹消されていない。バテシバは、ソロモンの母である。従って、その後、ダビデの家全体の先祖となり、さらに、新約聖書マタイ1章3節では、三人の奇異な女たち (タマル、ラハブ、ルツ) と共にイエスの先祖の一人である。彼女は、この物語全体を通じて生彩を欠いている。彼女は、あのアビガイルとは対照的である。彼女は、何の主導的態度も取らない。ダビデは、此れまで、罪を犯すということはなかった。ナバルとアビガイルとの出会いにおいても、むしろ罪を犯すことから守られていた。だが、バテシバは、ダビデの罪を示す者となるのである。

ダビデが罪を犯すその経緯には、悲劇的といえるような人間的偉大さが欠けている。彼は、原始的で、



名誉を保持しようとする詭計にも品位がなく、獸的である。それは、零落の行為としてより他に、名付けようがない。彼の行為は痛ましいほど卑小で、無節操である。何か邪悪な原理やプログラムがあり、何か複雑な事情があって、過ちを犯すのであれば、まだしもであるが、これは、極めて平凡陳腐な、俗悪至極な出来事なのである。

イスラエルの軍隊がヨアブに率いられて、遠い戦場にいる時に、エルサレムに留まっていたダビデは、昼下がりの眠りから起きて屋上にいた。彼が、低いところにある隣家の中庭を眺めると、そこで、からだを洗っているウリヤの妻バテシバを見て、他人の妻を欲求して姦通したのである。彼は、犯した不正の結果を避けるために、さらに続けて不正を犯す。それは、ウリヤを戦場から呼び戻すという愚かで、狡猾な欺瞞を試みるのである。ダビデの目論見は、ウリヤに自分の家に行かせ、バテシバのところへ行かせることであった。そうしたならば、ウリヤは、バテシバがやがて生む子供を自分の子供と考えるだろう。しかし、それは、失敗する。そして、バテシバとの姦通という事実を隠すために、ウリヤを最前線に出してイスラエルの敵の手で殺させるのである。バテシバは、夫の死を嘆き、「その喪が過ぎた時、ダビデは人をつかわして彼女を自分の家に召し入れた。彼女は彼の妻となって男の子を生んだ」(11章27節)。すべてのことは起こった。そして、すべてのことは隠蔽された。「しかし、ダビデがした事は主を怒らせた」(11:27)。ダビデは、ヤハウエと自分自身の選を全面的に否認し、そして、姦通・欺瞞・凶悪な裏切りに陥ったのである。ダビデは、すべての他の諸国民の小さな「王」(melek) やサルタンや専制君主と同じ役割・流儀・水準を示す。しかし、これは、神に対して、イスラエル全体と全ての人間が、どのように罪を負わされているかということを示しているのである。<sup>64</sup>

#### 4. 時間的歴史的限界 (zeitlich geschichtliche Begrenztheit) との関係における拒絶

バルトは、これまで怠慢の罪を、「愚かさ」、「非人間性」、「零落」として展開してきた。ここでは、「憂慮」(Sorge) として取り上げる。

人間イエスは、その生命を神と人間に捧げた。それは、その時間の結末と終わりにおいて十字架につけられた方として、永遠に生きるためであった。イエスは、神と我々の為の生、勝者イエスの生、僕でありつつ我々の主・頭・新しい人間・聖なる人間・高擧された人間の生を生きられた。また、罪人でありながら聖化されており、神の敵でありながらその交わりへと入れられ、そのような人間の生となられたのである。我々は、存在の限界の中に生きている。イエスの死は、十字架の勝利として我々のための生であるゆえに、我々は、安心して勇気と希望をもって前進すべきなのである。イエスは、我々に、我々の最後を楽しみとし、我々が限界に達することを楽しみとする自由を与えられた。何故かと言えば、その場所に彼がおられるからである。彼は、まさに我々の希望である。<sup>65</sup> だが、我々は、安心して、希望を持たず、後ずさりする。その限界において、存在に感謝をもって最後の時を迎えようとしなないということに、全ての悪は始まる。全ての悪の根源は、端的に人間の憂慮であるとバルトは言う。人間の憂慮は、空無 (nichtig) である。それは、ままた、徒勞 (vergeblich) でもある。何故なのか。それは、人間の憂慮が徒勞であるのは、運命或いは自然の経過によって人は過ぎ行くということ、人の存在が期限づけられているゆえなのか。そうではない。人間の生の限界は、神の善き秩序であり、創造者としての神の恵みと憐れみであるとバルトは言う。人は、この秩序を感謝と喜びをもって肯定すべきであるのに、それに反抗する。それゆえに、人の憂慮は、徒勞であり、空しい。人は、「自分の寿命をわずかでも延ばすことは出来ない」(マタイ6:27) を聞き、「我々の天の父は必要なものはご存知である」(マタイ6:32)、「明日のことを思いわずらうな」(マタイ6:25~34) ということを開かねばならない。そのような事実が、我々に告げられている故に、憂慮は、徒勞であり、空しいのである。全ての憂慮の対象は、運命や自然の経過としての姿においても、神によって突破され排除されたのである。<sup>66</sup>

では、人は、どのようにして、憂慮を捨てることが出来るのだろうか。人間には、恐れている全てのものが除去されても、別の新しい憂慮が湧き出てくる。何故かと言えば、やがていつかは、人間は終わ

りの日を迎えるからである。人の生が彼岸に向かって行く時に、神ではなく、無 (nichts) が近づくのを見るのであれば、彼には、憂慮しかあり得ない。そのような人間の姿をバルトは、不満な者 (der Unzufriedene) と称ぶ。<sup>29)</sup> 人間生活において、作用しているのは、既に撃退された虚無である。この敵を思うことが、人を不満な人間とする。即ち、人は、この敵によって脅威を受けていると考えるために、憂慮し、自分の有限性に不満を持ち、将来に向かって進んで行くのである。憂慮とは、そのような死に由来する生活であり、死に向かった生活である。人が、自分の限界に満足し、それを喜ぶというのをしない時、その限界は、その人の生命を脅かすものになる。憂慮は、人間の時間性という観点から見ると、人間の悪しき拒絶と不履行として、人間の罪そのものである。勿論、人は、憂慮する時、自分の存在や行為を告白しようなどとは思わない。もし、人が、自分を脅かしている敵や前面にある深淵は無であり、自分は神の御手と守りの中にいるのだという客観的事実に面して生きていれば、今さら憂慮に沈むということは決してないのである。だが、そのように生きることをしない場合には、愚かさを隠蔽する。

さて、バルトは、憂慮は錯誤が原因であるとして、以下の3点を取り上げる。

(1) 憂慮は、その根底において、神からの疎隔、疎遠である。我々が、神を死における希望として認識することは、自明のことではない。そのためには、神の自己啓示を必要とし、神の御言葉の働きと神の聖霊の働きを必要とするのである。もし、神が、われわれの近くにいますとすれば、人の生の限界においてである。神の自己啓示は、あの限界から示される。即ち、我々の終わりであるところで、創造者・和解者・救贖者なる主が我々に会うのである。人は、この神に対して自分を閉ざしてしまった。神を信じ、神を愛し、神に希望をかけ、神に祈るべきことに身を閉ざしてしまった。憂慮は、人間を愚かにする。

(2) 憂慮は、人間の交わりを破壊する。真に実在的なものだけが、人間を真に集めることが出来るのである。希望無しの死や脅威という幻影には、人間を集める力はない。神に対して隔離する人は、人間仲間に対しても、必然的に隔離するのである。それは、単に隔離するだけでなく、分離させ、分散させる。憂慮は、人を一つにしないで、遠心力によって分離させる。そこでは、人間と人間の真実の共同生活を生じず、確執と不和と戦いと世界戦争が生ずる。憂慮は、人間の交わりを解体し、破壊し、アトム化する。

(3) 憂慮は、人間の体と魂の統一を解体する、無秩序に到達する。憂慮する者は、自分の有限性に不満であるために、自分自身矛盾に陥る。彼は、もはや、魂として支配し得ず、体として奉仕し得ない。彼は、魂としては、どこか自分が選んだ良い土地へ逃亡することによって反応し、体も、様々な自己栄光化という形で、更に拒絶という形で、また病気という形で反応する。それは、人の内部にいる無神論者と非人間性だけでなく、浮浪人をも呼び出す。有限性に不満な者は、それら三者を自分の内部に持っているのである。

神は、そのような人間を愛された。神は、そのような人間に、イエスを、救い主・救いの訓令・救助者として与えて下さった。神は、神を侮辱し、人間仲間を踏みつけ、自分自身を破壊させる、まさにそのところで、イエスを人間に与えて下さった。神は、この人間に対して、圧倒的な確かさをもって、語られた。「主は近い。何事も思い煩ってはならない」(ピリピ4章5節)。<sup>30)</sup>

バルトが、この項で、聖書の例証として、民数記13章と14章を取り上げる。

この聖書本文の意図は、荒野から約束の地へ移るというイスラエルの歴史の救済史的行動の中で、悪しき憂慮が演じた恐るべき危険な停滞という役割を示すことにあるとバルトは言う。<sup>31)</sup> 荒野で、イスラエルが目指しているのは、ヤハウエが約束した土地であった。そこには今、他の民族が住んでいるけれども、ヤハウエが約束した限り、イスラエルの土地であった。しかし、彼らは、盲目の者として、連れられて行ってはならない。モーセとヤハウエによって、また、自ら危険を冒しつつ、そこへ連れられて行くのでなければならない(民数記13:18以下)。それゆえ、モーセは、12名の間諜を選び、派遣した。

これらの間諜は、その国の国境を越えて行き、そこで見てきたことを報告する役割がある。彼らは、その国の果物を、取ってくるように命ぜられる。「時は、ブドウの熟し始める季節であった」(13:20)。モーセは、そのような初なりの果物だけれども、感謝と喜びと勇気呼び起こして、証拠としての働きをするに違いないと思ったのである。モーセが目指しているのは、イスラエルがヤハウエの約束を想起し確認させることにあった。12名の間諜は、ただ約束の証人となることであったのである。

ところが、今や、憂慮が現れる。それは、あの12名の間諜のうち、10名が拒絶するのである。勿論、彼らは最初は、熱心に任務を遂行した。彼らは、ヘブロンのエシコルで、大きな葡萄の枝を切り取り、「これを棒をもって、ふたりでかつぎ、また、ざくろといちじくをも取った」(13:23)。それから、彼らは帰り、報告し、次のように言った。「私達は、あなたが遣わした地へ行きました。そこはまことに乳と蜜の流れている地です。これはその果物です。しかし…」(13:27以下)。「しかし」という言葉が現れる。「しかし、その地に住む民は強く、その町々は堅固で非常に大きく、わたしたちはそこにアナクの子孫がいるのを見ました」(13:28 節以下)という言葉である。彼らの報告の結論は、「私達は、その民のところへ攻めのぼることは出来ません。彼らは私達よりも強いからです」(13:31)ということであった。従って、彼らは、ヤハウエの証人として見ず、語ることも出来ず、その民に対して勇氣ある言葉言うことも出来ず、ただ自分たちの憂慮を証し出来たに過ぎない。これを聞いて「会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした」(14:1)。次の日には、そのつぶやきは、モーセとアロンに向けられる。「全会衆は彼らに言った。『ああ、私達はエジプトの地で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに。なにゆえ主は私達をこの地に連れてきて、剣に倒れさせ、また妻子をえじきとされるのであろう。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか』(14:2)。このようにして民は、ヤハウエの約束と信実と力を見ないで、あの諸種族とその城砦と背の高い人々を見たのである。「そこでモーセとアロンはイスラエルの人々の全会衆の前でひれふした」(14:5)。二人は、何の抗弁もせず、慰めや警告の言葉も語らなかつた。ただ、憂慮によって逆上している群衆にひれ伏しただけであった。

だが、民の憂慮に反対し、ヤハウエの召命と約束に固執した二人の証人がいた。ヨシュアとカレブである。「彼らは、衣服を裂いた」(14:6)。そして、逆上した状態の憂慮の嵐に向かって語った。「私達が行き巡って探った地は非常に良い地です。もし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわたしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません」(14:7以下)。しかし、「会衆はみな石で彼らを撃ち殺そうとした」(14:10)。この逆上した憂慮は、モーセとアロン、それに二人の証人を殺そうとしただけでなく、神の約束を抹殺しようとしたのである。民は、神を敵としたのであった。

結末は、暗い。「偽りの10名の証人たちは、突然死ななければならぬ」(14:37)。愚かな憂慮を持ち、逆上した人々は、ヨシュアとカレブを除いて、約束の地を見ることは出来ず、荒野で死ななければならぬ。

彼らの「不信仰」は、どのような形であれ、それが陥るべき運命に陥ったのである。14章44節によれば、神の契約の箱が守られたということだけが、唯一の慰めである。<sup>60)</sup>

## 注

(1) Karl Barth 『Kirchliche Dogmatik』IV/2 s.452 井上良雄訳 47頁

(2) a.a.O. s.454 上掲書 50頁

(3) a.a.O. s.457 上掲書 53頁

(4) a.a.O. s.463 上掲書 63頁

(5) a.a.O. s.467 上掲書 69頁

(6) a.a.O. s.471 上掲書 75頁

- (7) a.a.O. s.474 上掲書 79頁
- (8) a.a.O. s.476 上掲書 81頁
- (9) a.a.O. s.477 上掲書 84頁
- (10) a.a.O. s.480 上掲書 88頁
- (11) a.a.O. s.482 上掲書 91頁
- (12) a.a.O. s.483 上掲書 92頁
- (13) a.a.O. s.486 上掲書 98頁
- (14) a.a.O. s.491 上掲書 106頁
- (15) a.a.O. s.499 上掲書 117頁
- (16) a.a.O. s.501 上掲書 120頁
- (17) a.a.O. s.504 上掲書 125頁
- (18) a.a.O. s.505 上掲書 127頁
- (19) a.a.O. s.506 上掲書 128頁
- (20) a.a.O. s.509 上掲書 132頁
- (21) a.a.O. s.510 上掲書 134頁
- (22) a.a.O. s.516 上掲書 143頁
- (23) a.a.O. s.520 上掲書 148頁
- (24) a.a.O. s.527 上掲書 159頁
- (25) a.a.O. s.528 上掲書 161頁
- (26) a.a.O. s.531 上掲書 165頁
- (27) a.a.O. s.531 上掲書 166頁
- (28) a.a.O. s.541 上掲書 179頁
- (29) a.a.O. s.542 上掲書 181頁
- (30) a.a.O. s.546 上掲書 187頁

## 五、人間の虚偽

バルトは、和解論第一部では、人間の罪を、神のようになろうとする、「高慢」という術語で示した。そして、和解論第二部では、愚かさ・非人間性・零落・憂慮という沼の中に落ち込む「怠慢」として示した。第三部では、人間の罪を仲保者の生の光に抵抗する、「虚偽」(Lüge)という術語で取り上げる。

バルトは、まず、人間の虚偽は、回避運動(Ausweichbewegung)であるということを確認しておきたいと言う。人間の虚偽は、イエス・キリストとの関係の中でだけ起きる。それは、彼との出会いの中でだけ、信仰と愛と希望の認識が可能となり現実となるのと同様に、人間の虚偽も、同じ畑の麦の中の毒麦のように、生じると言う。<sup>(2)</sup> 虚偽という罪の形態は、人が、イエス・キリストとの出会いを恐れ、そこからの回避を試みることである。また、人間の虚偽は、すでに人間に接し人間に迫って来る真理から身を守ろうとする試みとして生じる。人間の虚偽は、ちょうどゲッセマネの園でのユダのように、自分の主人の口に接吻することによって、自分本来のことをしようとする。それは、真理に敵してではなく、真理と共にであり、真理に味方して、本来のことをしようとするのである。<sup>(3)</sup> それゆえに、人間の虚偽は、極めてキリスト教的であるゆえ、真面目で立派な尊厳の姿で現れる場合には、虚偽の人間を相手にしているのだという、心備えをしなければならない。虚偽は、ヒトラー、ムッソリニ或いはスターリンのような、感じの良くない連中と違って、善良な人々から拍手喝采と追従を期待できるような感じの良い人物である。従って、虚偽を真理と区別することは、誰も出来ない。

しかし、真の証人としてのイエス・キリストは、虚偽を確実に真理と区別される。イエス・キリストは、罪の人間の身に起こる御自身との出会いにおいて、虚偽を、真理の顛倒として見抜くことが出来る。

従って、イエス・キリストに目を注ぐことによって、彼との関係で虚偽の本質を認識することが出来る。人は、何を恐れるのか。罪の人間が、その最高の仕事としての虚偽によって消却したいと願ひ、非真理に変えたいと願う真理とは、何か。

真理とは、神との世の和解である。それは彼（イエス）御自身において起こった和解である。それは、神と人間の間の契約であるが、しかし、それは彼御自身において成就された契約である。それは、神の義とし聖とし、人間の交わりの中に活きている恵みの契約である。彼（イエス）は、御自身を証しすることによって、この真理を証しする。人間は、この真理に出会うことなしには、神に出会うことは出来ない。人間との神の恵み深い交通、また神との人間の感謝すべき交通という観念には、何の躓きもない。この真理に信頼すべきイエスの現実存在にも、何ら非難すべきものはない。この真理との同一性 (Identität) におけるこの人間、この人間との同一性におけるこの真理、それが、罪の人間が回避したいという躓きであり、恐れである。<sup>(4)</sup> 罪の人間は、この事柄から逃げたいと思ひ、そのような同一性を承認しない。そして、その同一性の事実を非同一性に解釈し直し作り変えたいと願う。

人間がイエス・キリストとの出会いにおいて経験しその虚偽によって除去しようとする躓きとは、別の視点から見れば、あの真の証人がゲッセマネとゴルゴタの人であり、真理が彼の苦しみと死との真理であるという点にある。この真理と他の様々な真理の区別は、イエス・キリストが、その業の全体によって次第に十字架に導き入れられ、十字架に向かって進み、それをその業の完成において担い、甦り生き支配されたという事実である。また、真理とは、神の御名が聖化され、神の国の到来が、神の意志の生起が、神と人間の間の契約の成就が、彼の血が注がれることによって出来事となったということである。イエス・キリストは、真の証人であり、自ら真理であられる。従って、彼が、人間に出会うのは、そのような躓きにおいてであり、そのような愚かさにおいてである。<sup>(5)</sup> しかし最後に、真の証人であるイエス・キリストと出会う罪の人間を恐れさせるもの、従って虚偽によって取り除かなければならぬことを、ただ一つの分母 (Nenner) の上に置くことが出来る。即ち、問題の中心は自由ということである。神は、罪の人間に、無比に自由な方として立ち向かい、それによって罪の人間の身にも、無比の自由が起ることであり、その承認が人に求められている。それは、神御自身とは違ったあらゆる前提や道徳的な原則・法則・基準・規範にはまったく左右されることなしに、積極的に言えば、御自身があらゆる前提の前提である善として、即ち、一切の善の源泉・標準として、彼の愛の自由においてなされた。そこで人間に与えられ、同時に彼に要求されるのは、自由な神に属する者の自由であり、自由な神によって自由にされた者の自由である。人間の自由とは、神をも人間自身をも制約し限定しているあらゆる前提からの解放を意味し、あらゆる恣意的な自分自身の前提と同時に自分自身からの解放を意味する。<sup>(6)</sup>

罪の人間は、そのような自由な神を恐れ、そのような神によるまた神のための人間自身の解放を恐れる。先ず、自由な神との自由にさるべき人間の対決の出来事そのものを、体系化するということが起こる。即ち、その対決を無視して、その出来事の意味を、神的で無限で絶対的な実在と、人間的で有限で相対的な実在という二つの実在の秩序づけと体系の中に求めることになる。即ち、二つの存在を越えて両者を総括する原理によって、両者の類似性と同等性を示し、それによって、その秩序づけは基礎づけられ、保持されるのである。そこには、もはや、与えることと受けること、要求と服従は、存在しない。そのような原理のもとでは、神と人間との対決は、決定的な重要性を持ち得ないし、自由な神による人間の解放という性格を、持ち得ない。そこでは、古いものが滅びることもなく、新しいものが生じることもない。一般的に言えば、神と人間の双方を越えて包含する秩序という観念による、神の自由と人間の自由のそのような除去こそ、また神との人間の対決のそのような無力化と弛緩化こそ罪の人間の虚偽が、目指しているものなのであった。<sup>(7)</sup>

さて、今まで取り上げてきた人間の虚偽は、人間の様々な不信・迷信・謬信において働く非真理と、直ちに同じではない。確かに客観的には、そのような一般的な諸現象においても、真理に対しての、自分自身をそのようなものとしては覆い隠し勝ち誇ったように見える見かけ上の否定が行われる。そして

その限りにおいて、罪の人間の虚偽の表明が行われる。しかし、それは、イエス・キリストの預言との比較においてだけ、可能で正当な確認であり判断である。それは、二次的現象と呼ぶ他はない。罪の人間は、単に客観的にではなく主体的にも、単に事実上ではなく意識的・計画的・意図的にも、虚偽を行う。そこで初めて、人は、真理を恐れ真理を回避しようとし、それが不可能なので、あの虚偽の様々な手だてに手を伸ばすという、真剣な理由と動機を持つようになる。そこで初めて、人は、虚偽者として自分を罪ある者とする。<sup>(8)</sup>

バルトは、最後に『ヨブ記』をこの虚偽の項での例証として取り上げる。

此処に登場するヨブの三人の友人、テエマンびとエリパス、シュヒびとビルダテ、ナアマびとゾバルは、真の証人を偽の証人たちから区別し、真理を虚偽から区別するということが、どれほど困難なことを示していると、バルトは解釈する。<sup>(9)</sup> 何故かと言えば、そこでは、ヨブの極めて粗暴で神冒瀆や神否定に近い表白とは著しい対照をなして、疑いもなく立派で真面目で敬虔な友人が、疑いもなく立派で真面目で敬虔な言葉を、まさに黄金の言葉を語っているからである。即ち、それらの言葉は、最後には神によってその僕として確認された神の真理の証人として承認され明瞭に示されるヨブの言葉よりも、教会教育や牧会や典礼や説教で用いるためには、比べようもないほど適当な言葉なのである。しかし、ヨブの友人たちは、神の証人であるヨブにとって最上のことを願っている者として紹介されているのであって、自分たちが「サタン」の代理人としてヨブに対しての最悪の誘惑者だということは少しも予想せず、むしろ立派な誠実さで語り、ただ残念なことは、そのような立派な誠実さで根本的に間違ったこと危険なことを語ってしまうのである。ここで見落としてはならないことは、神の最終的な怒りは、さし迫った審きを避けるために、「あなたがたの愚かさを罰することをしない」(42: 8) 免責として雄牛7頭、牡羊7頭を燔祭のために献げよという求めであったことである。そして、彼らのためのヨブの執り成しの祈りと、神がその祈りを受け容れたということが、彼らについて述べられた最後の言葉であったことである。しかしそれだからと言って、彼らに対する判決には変わりはない。彼らの優れた弁論を批判的に読まねばならないと、バルトは言う。<sup>(10)</sup>

先ず、ヨブの友人たちが、ヨブを教え回心させるために語ることが、それ自身としては極めて聞くに値するものだということを、承認しなければならない。人間の虚偽が、もしそれらの友人たちの弁論において、直ちに明瞭に虚偽として示されるようなものであれば、それは人間の虚偽ではない。即ち、人は、正しくない場合にも、正しいものであるとして、語るものなのである。<sup>(11)</sup>

さて、神の判決によれば、神について正しく語った者であるヨブが、友人たちの弁論に答えるその仕方がすでに、全くそれとは違う方向を指し示している。ヨブは、彼らに対して実質的に一步も退かないということだけでなく、ヤハウエ御自身が介入されるまでは、その嘆きと訴えの線上に、揺るぐことなく踏みとどまる。ヨブは、友人たちの提起する問題に決して立ち入ることがなく、むしろ友人たちが彼に語ることを平然と無視し、彼らの語りかけに対して断固として鋭く厳しい拒否の言葉によって貫かれている。「わたしは断じて、あなたがたを正しいとは認めない」(27: 5) とヨブは、彼らに叫ぶ。もし、ヨブが彼らを正しいと認めようとするれば、彼の舌は虚偽を語らなければならないのである。だが、ヨブは言う。「あなたがたは偽りをもってうわべを繕う者、皆、無用の医師だ」(13: 4)、「あなたがたは皆人を慰めようとして、かえって人を煩わす者だ」(16: 2)、「あなたがたの格言は灰のことわざだ。あなたがたの盾は土の盾だ」(13: 2)。さらに、ヨブは、友人たちの弁論によって、自分がただ10倍罵られ侮辱され虐待され苦しめられ傷つけられ圧しつぶされるだけだということを知る(19: 2以下)。そのことから、ヨブは、友人たちに対して、告発と威嚇へと移ってゆく。「神があなたがたを調べられるとき、あなたがたは無事だろうか。あなたがたは人を欺くように彼を欺くことができるか。あなたがたがもし、ひそかにひいきするならば、彼は必ずあなたがたを責められる。その威厳はあなたがたを恐れさせないであろうか。彼をおそれる恐れがあなたがたに臨まないであろうか」(13: 9以下)。「つるぎを

恐れよ、怒りはつぎの罰をきたらすからだ。これによって、あなたがたは、さばきのあることを知るであろう」(19:29)。この最後に引用した数箇所は、何が、ヨブをして、それらの尊敬すべき人々の弁論の実質的内容に掛かり合うことさえ不可能にし、ましてそのような弁論によって宥められることを不可能にし、むしろそれを断固として、否、怒りをもって斥けさせるのか、という問いに答えるための、それと同時に彼らが最後にヤハウエ御自身によって叱責された不正についての問いに答えるための、一つの示唆ではないか、とバルトは言う。<sup>(4)</sup>

その理由は、まず、ヨブの友人たちは神の立場で語っていることである。彼らは、ヨブが神の御手のもとで苦しまねばならないのに加えて、一人の人間が他の人間を苦しませることが出来る最悪のやり方で、彼を苦しめる。即ち、神に基づいて、神の御名によって忠告することで、苦しめる。彼らは苦心して自制した優しさで訓戒を語るが、その背後のどこかには、異端審問判決 (Autodafe) が、すでに用意されているのである。真の証人であるヨブは、決して神と並んで立ってはいない。神について良く知っていて教えることが出来るなどと、彼は考えていない。さらに、彼は神を弁護し擁護しなければならないなどとは考えていない。まして、自分が神について知っていることで、他の人々を免責したり、他の人を慰め助けるべきだなどと、考えていない。彼は、只、神の前に、神の下に立っているにすぎない。<sup>(4)</sup>次に、友人たちが、神についてヨブに語る際の、非歴史性 (Ungeschichtlichkeit) である。彼らは、無時間的な (zeitlose Wahrheiten) を説教する。即ち、イスラエルの歴史の文脈の中でいつかある時に神の具体的な言葉として輝き、神と人間の間の特定の出来事の文脈の中で恐らく繰り返し輝いた真理ではあるが、しかしそのことを度外視して、ただ切り花のように生き続け花開くことの出来る、そのような真理を、彼らは説教する。

ヨブの言葉は、彼が今置かれている状況について語り、彼に対してのヤハウエの不可解な叙述であり、ヤハウエに対しての現在の彼の苦痛・苦悩・嘆き・問い・抗議についての報告である。ところが、友人たちの弁論は、何か講堂のような雰囲気の中で、ヨブの問題から引き出されたというだけではなく、問題に対して釣り合いが取れ円熟した説明を、多少困惑と憤懣の感情を伴った優越感で対置される。彼らは、神と人間の間に起こることを見もせず、理解もせず、そのようなことについての感覚も範疇も持っていない。彼らは、最初から、非真理によって取り囲まれた真理について語る。それゆえに、彼らは、どれほど神学的に優れているにしても、真の証人ヨブと直面することによって人間の虚偽を、明示するのである。<sup>(4)</sup>

さて、ヨブの姿と彼の友人たちを比較すれば、友人たちは固有の顔を持たぬ脇役であり、ヨブの行状・態度・言葉における真理の一回限りの啓示と比較すれば、友人たちの型通りのものにすぎぬ弁論における虚偽の啓示も、ヨブ記が本来目指していた叙述の付録のように思われる。しかし、この付録は、真の証人が登場するところこそ、問題の多い彼の友人たちも出現し、神と人間の真理があらわになるところこそ、人間の虚偽もあらわにならざるを得ないのである。<sup>(4)</sup>

## 六. 補 遺

バルトの『和解論』の構成は3部作から成立している。IV/1は、「僕としての主イエス・キリスト」、IV/2は、「主としての僕イエス・キリスト」、IV/3は、「真の証人イエス・キリスト」である。そして、それぞれの部門で「罪」について考察しているわけである。即ち、IV/1では、「高慢」、IV/2では、「怠慢」、IV/3では「虚偽」と名づけて罪を取り上げている。興味深いのは、バルトの聖書の考察と釈義である。「高慢」では、『創世記』におけるアダムと、『サムエル記』のダビデの罪についてである。「怠慢」の罪は、『サムエル記』に登場する愚か者ナバルと賢い妻との対応、それと、『アモス書』のアモスによるイスラエルの滅亡預言である。アモスは、他の預言者と違って、イスラエルの滅びの原因を、王と民のバアル礼拝ではなく、社会正義の欠如、他者に対する無関心を批判した。最後の「虚偽」については、『ヨブ記』を例証として取り上げている。ここでは、真面目で敬虔な信仰者 (友人) を、鋭く批

判して虚偽と言うのである。

しかし、バルトは、罪について取り上げる場合に、「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者ではなく、またこの懲税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」(ルカ18章9節以下)というフアリサイ派と、自分は違うなどと考えるてはならないと戒める。

2002年10月4日

#### 注

- (1) Karl Barth 『Kirchliche Dogmatik』IV/3 s.426. 井上良雄訳 IV/3 5頁
- (2) a.a.O. s.501 上掲書 122頁
- (3) a.a.O. s.504 上掲書 126頁
- (4) a.a.O. s.508 上掲書 131頁
- (5) a.a.O. s.509 上掲書 133頁
- (6) a.a.O. s.515 上掲書 142頁
- (7) a.a.O. s.516 上掲書 143頁
- (8) a.a.O. s.519 上掲書 147頁
- (9) a.a.O. s.522 上掲書 151頁
- (10) a.a.O. s.523 上掲書 152頁
- (11) a.a.O. s.524 上掲書 153頁
- (12) a.a.O. s.525 上掲書 155頁
- (13) a.a.O. s.526 上掲書 157頁
- (14) a.a.O. s.527 上掲書 159頁
- (15) a.a.O. s.531 上掲書 165頁

#### 参考文献

- Karl Barth 『Kirchliche Dogmatik』IV/1 Evangelischer Verlag A.G.Zollikon Zürich 1953年  
井上良雄訳『和解論』I/3 (新教出版社 1960年)
- Karl Barth 『Kirchliche Dogmatik』IV/2 Evangelischer Verlag A.G.Zollikon Zürich 1955年  
井上良雄訳『和解論』II/3 (新教出版社 1968年)
- Karl Barth 『Kirchliche Dogmatik』IV/3 Evangelischer Verlag A.G.Zollikon Zürich 1959年  
井上良雄訳『和解論』III/3 (新教出版社 1986年)
- Karl Barth 『Kirchliche Dogmatik』I/1 Evangelischer Verlag A.G.Zollikon Zürich 1955年
- Karl Barth 『Gottes Erkenntnis und Gottesdienst nach reformatorischer Lehre』  
Verlag der Evangelischen Buchhandlung Zollikon 1938年
- J. カルヴァン著『キリスト教綱要』I 渡辺信夫訳(カルヴァン著作集刊行会)昭和37年
- 桑田秀延著『基督教神学概論』(新教出版社)昭和33年